

# 国づくりの石研修

101  
SUMMER  
2003

●特集●

## こんなまちに住みたい

～人がまちをつくり、まちが人をつくる～



### 琵琶湖疏水 南禅寺水路閣

19世紀末、東京遷都後の京都の復興と水の確保を目的として、琵琶湖から、トンネルを通して、疏水が開かれた。  
設計は当時19歳23歳の田辺新助。  
南禅寺の境内をア-4橋の水路が走り、  
100年を越え、古色をおびた赤レンガが新緑に映える。



## 静岡県舞台芸術公園 野外劇場「有度」<sup>うど</sup>

約21haの広さを持つ公園内には、野外劇場「有度」、屋内ホール「楯円堂」、研修交流宿泊棟、稽古場棟などが点在している。「有度」は、伊豆で採石された「若草石」を敷き詰め、自然の樹木を利用したホリゾン、茶の木を植えた花道ならぬ「茶道（写真手前）」を備えた珍しい野外劇場で、約400人を収容する。劇場施設は落ち着いた黒で統一され、円形劇場の左右客席両翼を取り去った舞台空間は、より濃密な舞台空間となって観劇者たちに迫ってくる。

（撮影と文・橋本武彦）

特集

## こんなまちに住みたい ～人がまちをつくり、まちが人をつくる～

- 4 都会住みのひいき目 青木奈緒
- 6 座談会 まちが動くとき  
原 研哉 × 青山佳世 × セーラ・マリ・カミングス
- 12 スローなまちづくり 進士五十八
- 16 町歩きのおしむきを —  
私の「こんなまちに住みたい」論 渡辺武信
- 22 ユニバーサルタウンをめざして  
— 感動を生み、感性を育むまち 白石正明
- 26 「町の意志」が感じられる町  
— 長野県小布施町 鈴木輝隆
- 30 人ありてまちあり  
— 住民が主役のまちづくり 愛媛県・内子町
- 32 このまちに暮らす10年後の人々へ  
— 本吉町公民館写真教室が綴るメッセージ



内子町(愛媛県)

- 38 人物ネットワーク  
原口智生
- 60 ヒマラヤからの報告  
ネパール・子供たちの輝く未来のために 吉岡大祐
- 34 土と木  
日本の家は退化しているのではないか 吉田桂二
- 54 まちの色 風土の彩り  
セーヌ川の風景 葛西紀巳子
- 36 旅で出会った匂い  
ぴりりと香る奥飛騨の夏 八岩まどか
- 56 土木遺産の保存活用を支える伝統技術  
煉瓦 後藤 治・澤田浩和/小野吉彦
- 44 土木史余話  
中央線の建設工事 沢 和哉
- 42 KEYWORD  
平成15年版国土交通白書より
- 52 施設ウォッチング  
近代産業の黎明期に思いをはせて ヴェルニー公園・記念館
- 62 OPEN SPACE  
発見! 青山士の米国入国記録 高崎哲郎
- 48 教育現場を訪ねて  
高校生も参加する、スローでやさしいまちづくり  
— 吾妻高校福祉科の生徒とふくし・ふれあいロード計画
- 63 ほん  
『<街かど景気>の経済学』/『五感で楽しむ東京散歩』/『「農」の時代』/  
『ああメキシコ夜間小学校』
- 68 INFORMATION  
平野暉雄写真展ほか
- 64 業務案内

edit &amp; design

緒方英樹/高梨弘久  
小野久美子/室谷麻美子



東京・月島西仲通り ©世界文化フォト

# 都会住みのひいき目

青木 奈緒

東京生まれの東京育ちで、私はこの街を気に入っています。現に住みつけている場所をふるさとと感ずることはめったになく、第一、東京は郷愁で包むにはあまりに多彩な大都会です。普段の生活圏外にまだまだ見知らぬ東京がいくらかもあって、いまだかつて下車したことのない駅が、これまでも、またこれから先も、たくさん残っているでしょう。単に私が知らないだけで、駅周辺には大勢の人がそれぞれの生活を送っているのです。昔から、袖ふりあうも、と言いますが、まだご縁に恵まれない多くの方を楽しく思い浮かべ、だからこそわずかご縁のある方々を大切に、と思うのが大都会のよさかもしれません。何もかものみこんで、この街はいつたどこへ向かっているのか。一週間前の電車の中吊り広告をいったい誰が覚えていたろう、という構わなさが好きなのだと思います。

東京を好き、と気がついたのは、定石通り、この街を離れたときでした。生まれてこのかた親もとで安穩に育ち、いきなり瓢箪から出てきた駒と自らの方位磁石を信じて、大学卒業後にオーストリアとドイツへ行くことになりました。いざ、ひとりの生活が始まると、いたるところで自己紹介です。そこで決まって聞かれるのは、日本のどこか



あおき・なお

作家・翻訳家

1963年4月東京都・小石川の生まれ。  
 学習院大学文学部ドイツ文学科卒業、同大学院修士課程修了。  
 オーストリア政府奨学金を得てウィーンへ留学。  
 その後89年より翻訳・通訳などの仕事をしながらドイツに滞在。  
 98年帰国。著書に「ハリネズミの道」、「くるみ街道」、「うさぎの聞き耳」、  
 「動くとき 動くもの」(以上、講談社)、訳書に絵本「リトル・ポーラベア」  
 シリーズ(ノルドズット・ジャパン)がある。

ら来たの、という問いでした。臆することなく東京と答えられる有り難さは、私の味わう初めての感覚でした。人口千百万だか二百万だかの内のひとり、と笑って口に出せる喜びです。

その後、ドイツには十年あまり住んで、今はまた古巣へもどって東京、小石川の暮らし。留守にしていた間中、たまの帰国のたび、あたりはびっくりするほど変わっていました。今もうちの近くは、ひとところ地上げされたまま残っていた土地へ、続々とマンションの建設ラッシュです。けれど、それも含めて否はなし。ただ欲をいえば、ひとつ申し上げたいことがあるのです。

自転車の扱いです。ここ数年、段々に自転車道が増えていますし、横断歩道の横には別途、自転車用のレーンができるようになりました。歩行者と自転車の区分が充分でないのは、施設上の問題だけではなくて、利用者の意識にも大きく関わることでしょう。とはいえ、都内を自転車で移動しようとする、せいぜいが歩くにはちょっと億劫という程度の近距離、しかも自転車走行に楽な道順を知っていないと

使えないのが現実です。

たまたまドイツで暮らしていたのが、自転車道がよく整備された街だったからもあるのでしょう。日本へ帰国して間もないころ、ドイツ気分が抜けぬまま、自宅から青山まで自転車で往復したことがあります。肉体疲労ではなく、精神的ストレスで、もう二度とご免とあきらめました。今では十分に東京の感覚にもどっていますから、小石川―青山を自転車で、と他人事で耳にすれば、無理しないで地下鉄にしたら、と答えるでしょう。でも、本当にそうでしょうか。距離にすればたいしたことではないのです。都内の移動には自転車をもっと活用できるはず。

そのためには、さらなる自転車道の整備もですが、駐輪場も必要です。あちこちに駐輪禁止の看板は見かけますが、それではどこならいいのか。熟知した場所でない、うろろうしたあぐけ、結局違反を承知でとめてしまいます。駐輪マナーの悪さはマスコミでも頻繁にとりあげられていますし、駅前駐輪場を容易に確保できないという事情もわからないではありません。

つまるところは、街全体で自転車をどういう乗り物と評価するか、という点に到達するのだと思います。何もドイツやオランダをそっくりそのまま真似をする必要はないでしょう。私人にとっては自転車利用の進んだ街は便利でしたが、自転車となれば靴や衣服にも関係しますし、ひいてはライフスタイルの話へとつながります。ただ、今のまま、中途半端な交通機関で満足してしまっていないかどうか。自転車の機能はまだまだ発揮されていないというのが正直な感想です。

東京にはもっとよくなつてほしい、と願うのは、そこに住む者のひいき目でしょうし、欲目でもあります。もしかしたら、ないものねだりかもしれません。街についてお尋ねを受け、思いつくのはこんなところでしょうか。いえ、本当を言えば、もうひとつあるのですが、何事も順々に。またいずれ、といっているうちに、お話する必要さえなくなつていくかもしれません。大都会に変化はつきもの。移ろう街の裏には、変化を支える人がいることを忘れて暮らしてゆきたいと思えます。

人がまちをつくり、まちが人をつくる

## まちが動くとき



原 研哉 ● 青山佳世 ● セーラ・マリ・カミングス

## 新しい風に吹かれて

青山 セーラさんと原さんは前からの知り合いですか？

原 では、鈴木輝隆さん（二六頁参照）の話から入りましょうか。彼は町村単位で全国をネットワークしている人で、まちづくりとかにかかわっているすぐれた活動家の方をたくさんご存じで、そういう人たちを訪ねては励ますのが上手なんです。励まして、招かれてを繰り返すうちに、ものすごいネットワークができたんだと思うんです。鈴木さんのような存在は地域にとってすごく大きい。

セーラ いろいろなところを飛び歩いて、収集した情報をうまく教えていく役割をこなしている人ですね。

原 ミツバチみたいに花粉をつけていろんなところを飛び歩いているから、そこで何かが受粉して、結実していくんでしょうね。そのようななかで、セーラの仕事と僕の職能というか、コミュニケーションの仕事が結びついたみたいな。

青山 鈴木さんというミツバチの蜜としてお二人も選ばれたわけですね。

セーラ 鈴木さんを介した楽しい場の出会いのあと、すぐ一緒に仕事をしたのではなくて、そのうち、原さんがかわった長野オリンピックの仕事と過去の作品を見せてもらって感動したんです。「この人だ」と思って、榎一市村酒造

場の瓶と看板をデザインしていただきました。

原 僕の知り合いでセーラと同じペンシルバニア出身の女性がいて、イギリスの職人を京都に連れてきて、茅葺き民家を英国式で葺き替えさせました。たまたま出会ったペンシルバニアの女性二人ですが、どうしてこれほど大胆に日本で活動できているのかは冷静に考えるべきです。

日本の文化やある種の美点が、世界の古文化の文脈の中でいかに貴重かということがきちんとわかっていて日本人は意外に少ない。それをセーラとかそういう人たちはちゃんと見つけられる。そこに大きな問題点を含んでいると思う。

青山 日本古来のまちのよさや、建物の魅力を見つけてくださるのは外国の方が多いですね。

原 そういうことが往々にしてありますね。

青山 たぶん日本人同士というのは、同じ地域に住んでいて、これがいいとか、これを変えたいと思っても、なかなかしびらみがあつてまちが動いていかないんですね。逆に、外からきた新しい風（人間）の刺激がないと、なかなか「よいしょ」と動けない。その背中を押しているのがセーラさんたちなんだと思います。

でも、セーラさんはなぜ日本の中の小布施を選んだのですか？

セーラ 私は日本に来ていろいろなところを見て回りましたが、なかなか自分の見つけた日本に出会いませんでした。私が探していたのは

古いものを大事にしながら新しい工夫に積極的に取り組んでいるところでした。それが、小布施だったのです。

そこは小さなまちだけれども、都度の高い、ユニークで特別な場所でした。古きよき日本を大事にしながら、昔に負けない新しい工夫に積極的に取り組んでいました。充実した生活の中にイベントあり、楽しさあり、隣同士のつながりも大切にしていました。そして、日本全国あるいは全世界から集まってくるいろいろな人と出会える場所として、とてもエネルギーがある。住んでいてとてもおもしろいまちですね。

青山 セーラさんの眠っていたエネルギーを小布施のまちが呼びましたとも言えますね。

セーラ そうですね。周りに生かされているとも言えます。まちの多くの人たちがこのままではいけないと思っていて、実際にそこで動き出すかどうかの違いはあると思います。

## 人を吸引するエネルギー

青山 原さんは、日本はもちろん世界中でイベントやデザインに関わってこられて、まちや人に対してどんな印象をお持ちですか。

原 僕は、東京という特別な場所に住んでいまずので「どんなまちに住みたいか」というより「どんなまちに行きたいか」と聞かれたほうが答えやすい。住まう人というよりも、「訪れる人」というポジションでお話をしたほうがいい

という気がします。

やっぱり、その土地というのは、景観やまち並みというより「人」だと思っています。

セーラのところの話を見ると、小布施には市村次夫さんという人がいまして、昔の「旦那文化」をいまに継げるような人なんです。

かつて江戸時代後期、交易の要所として栄えていた小布施で、豪農・豪商が葛飾北斎や小林一茶などの文人墨客を招いて文化の摂取に励んだように、市村さんもそれを現代に引き継ぐ知恵を持った人です。

紙をすく人も、着物をつくる人も、絵を描く人も、既製品のデザインをする人も、旦那のそういう高い欲望があつてはじめて成り立ちました。旦那の高い指向性に支えられて職人文化も開花し、家屋がおもしろくなり、庭も楽しくなつた。そうした旦那文化は、意外と地方に根強く核と



青山 佳世 (あおやま・かよ)

フリーアナウンサー

NHK「おはよう日本・季節の旅」で5年間、関東甲信越226ヵ所を旅して様々な出会いやその土地の魅力を伝える。また、NHK「こんにちはいっと6けん」で番組の企画とリポーターを務める。豊富な取材活動や広汎にわたる問題意識で、国土交通省・交通政策審議会委員をはじめ官公庁・団体などの委員、評議員などを多数歴任。

してあつて、文化が花開き、人が吸い寄せられていったんじゃないかと思っています。

市村さんも、人のやらない独自のオリジナリティを持っていて、ものを見る水準が高い。だから、半端なものでは納得しない。かつての旦那が北斎なんかを引き寄せたのと同じものを持っていて、セーラなんかもそれに引き寄せられたとも言えると思う。ですから、そういう人がいるまちというのは、いまでも文化の品質を保っているし、ことさらにまちの賑わいとか演出しなくても、たたずまいとして人を吸引する力がある。そういうまちが、やっぱりすごいと思うし、行ってみたいですね。

青山 ほかの地域ではどうですか。

原 鹿児島島の雅叙苑をやっている田島さんもエネルギーのある方です。この人は、自然とつき合うことがどういふことかよくわかっていらっ



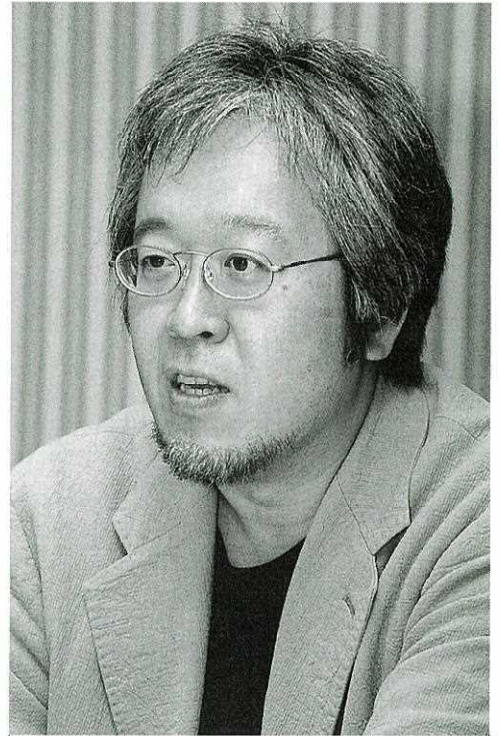
しやる。雅叙苑は茅葺きの古い棟を移築してや  
つている魅力的な旅館として成功しているの  
ですが、最近、田島さんは山を買った。山とい  
つても竹やぶだらけで、竹やぶというのは根が深  
い。その竹を田島さんとスタッフは延々七年間  
かけて取り除いて、きれいな雑木林にした。そ  
してそこを立派なリゾートにするんじゃないかと  
アダムとイブが裸で歩き回ったようなエリアと  
して森林管理したいと思った。その霧島連峰が  
見えるきれいな場所に、小さな部屋を五つだけ  
つくるという。究極の旅館みたいなものをつ  
くろうとしているのかもしれない。

竹を取るという作業は途方もないものです。  
田島さんは一人で黙々とやりはじめる。だけ  
それが少しずつできてくると、「この人の後  
についていくと何か実現するかもしれない」と思  
つてみんな手伝い始める。世界のどこにもない  
ようなものができていく感じがする。こういう  
人がいると周りも突き動かされるんですね。

セーラにしても、田島さんにしても、こうい  
うエネルギーを持っている人は、ものを見る目  
自分の中にある基準がはっきりしていて、迷わ  
なく進んでいく。そういう人のいる場所は魅力  
的ですね。

## 動き出す仕組みと方策を

青山 セーラさんは緑と文化の薫り高いペンシ  
ルバニア、原さんは後樂園という素敵な公園や



原 研哉 (はら・けんや)

グラフィックデザイナー

グラフィックデザインを基本にパッケージデザインからプロダクトデザイン、スペースデザインなど幅広いデザイン領域を視野に入れながら活躍中。長野オリンピックの開・閉会式プログラムや、2005年愛知万博のプロモーションでは日本文化に深く根をおろすデザインを展開。「Re-Design展」が世界を巡回中。著書に『マカロニの穴のなぞ』など。

川に恵まれた岡山、お二人とも豊かな自然とま  
ち並みが美しい場所で生まれ育ったということ  
ですね。私の場合は、愛知県の豊橋市、そうい  
う意味では都市の景観とかまち並みからはちょ  
っと遠いまちで生まれました。

私は、仕事でいろんな旅をするようになって、  
日本にもそういう歴史的なまち並みが残されて  
いるところとか、まちづくりでがんばっている  
ところを見て、「ああ、日本にもこんないいと  
ころがあるんだな」と感心しました。と同時に、  
一方で連続性がないというか、一カ所一カ所は  
それぞれにいいものが残っているんだけど、全  
体的に見るとまとまりがないイメージを受けた  
んです。

ところが海外に行ってみると、たとえばイギ  
リスにしてもフランスにしても、まちが線とな  
り面となって統一感がある。一つ一つの建物は

個性があるのに全体として調和している。有名  
な建築物じゃないのに、一戸の民家がそれぞれ  
に美しい。そういうまちを見て、「もうちょっ  
と一人一人が日本らしさを意識すればまち並み  
に表れるはずだと思いました。」

セーラ 日本の場合、戦後の古い建物や施設な  
んかは銀行のローンが終わっていて、そろそろ  
建て替えませんかという関係性の中で壊す方に  
積極的だったと思います。一方、それでも大事  
にしたいとすると、それを持っている人だけが  
すべての負担を背負っていかなければならぬ  
ような仕組みになっています。たとえば、ヨー  
ロッパなどの場合は、古いところを保存するた  
めに、個人が負担する場合は、区によって税金  
を安くしたりしています。

日本人はよく「アメリカは歴史がない」と言  
いますね。でも、私が生まれたペンシルバニア



は大学のまちなんです、一八五五年、日本では江戸時代の頃に始まった歴史に誇りを持っています。そのあと一八〇〇年代後半、日本の明治時代頃に建ったまち並みがダウンタウンではそのまま残っているし、「中は自分のもの、外はみんなのもの」でやってきました。勝手に変えたいと思っても許可にならない。どうしてもいろいろルールが必要です。

青山 いま、どんな点で苦労していますか。

セーラ 古民家再生をきちんとしたくても、たとえばお年寄りが昔の大きな一軒家に住んでいると、どうしても維持不可能になってしまふ。壊すにしても、生かすにしてもお金がかかります。それで、コミュニティ活動として学生さんとかボランティアの人、職人の組み合わせによって生かす方法を考えています。

青山 建物が守れなくなったりとかは、やっぱり相続税が大きいんですね。



小布施セッション



### セーラ・マリ・カミングス

榎一市村酒造場取締役・利き酒師

アメリカ・ペンシルバニア州立大学卒業後、1993年来日、94年小布施堂入社。98年小布施町で「第3回国際北斎会議」を招致。その後も数々の文化事業を推進。2001年8月8日から始めた「小布施セッション」では毎月ぞろ目の日に様々なジャンルの講演者を招いて交流を図る。2003年1月から「市ゴミ0」をスタート。

セーラ そうです。早く相続税を減らしてほしいです。いま三つの蔵を長野からいただくことになったのは、本当はその場所に残すのがベストだったのに、相続税によって手放さざるを得なくなりました。

本当は日本人もいい考えを持っているし、いいことをしたいと思っていますが、いまの政治が方針を工夫して考えていかないと、なかなか生かせないことがたくさんあると思います。

たとえば学校にしても、昔の学校が残っているところがほとんどありません。新しい工夫とか、今の時代にあった設定が必要でしょうが、もう少し生かせる方法はなかったのでしょうか。

あるいは、小布施でもいま問題になっているんですが、町村合併は絶対にしたくない。日本は、本来は小さなものでも大事にした国で、ただ大きくなれば問題がなくなるわけじゃない。それ

なりの大きさに合った対策、工夫が要るのではないのでしょうか。

### 元気の素はなんですか？

青山 小布施の場合、長年の積み重ねもあるし、単独でもがんばっていきける元気がありますね。

セーラ 元気というのは、動き出せば自然に元気になるけれど、いまの日本はあまりに動かない。民間と行政が力を合わせれば、楽ではないけれど、自分たちの個性ある「住みたくなるまち」をつくっていきけると思うんです。

いま小布施で、三〇〇〇人規模のマラソン大会を準備しています。これは市民運動から始まりまして、町の予算は限られていますので、一応、認識し、協力はしますというところまでできました。また、今年の一月から「市ゴミ0」と名づけ、月に二回、十五日と三〇日にボランテ



## 発想の方向を変えてみよう

イアでまちの周りをきれいにしています。みんなの問題だけれども、だれの問題でもないようなところを少しずつ片づけていくんです。

ソフトの部分は素早く動く、ハードの部分は何年でもかけてじっくりやるのが大事です。

青山 元気を出せば元気に走れるという、その最初の元気をだれがつくるかですよ。

セーラ 自分です。自分から動く。次の山を見るためには、ある程度踏み出さないと見えてこないことがたくさんあると思います。

それともう一つ言いたいのは、日本全国を旅すると、若い人ががんばっている姿があまり見えない。畑にしても、おじいさん、おばあさんが一生懸命やっている。もちろん、高齢者の方が持っている知恵や知識を若い世代につなげていくことは必要なことですが、若い人が自分のまちを愛して、よくしようとする姿がやっぱり素敵だと思う。いま、若者の就職難とか引きこもりとか問題になっていますが、そういう若者がまちで元気よくがんばっていける場所やチャンスをつくらなければならぬと思います。

青山 私たちの小さな頃も、地域の活動は、地元で商店をやっている人たちが中心になっていました。でも最近の日本は、商店の元気がなくなっていて、どうしても都心に行かざるをえなくなっています。ですから、そういう若者たちが地元で元気に働けるようなことも考えないと、まちが元気にならないですね。

原 その辺に関して一つ言いたいのは、農業のことです。農業というよりも「農」と言ったほうがいいかもしれませんが、これからは農業がとても魅力的な産業になっていくと思います。

いままではどちらかというと、「農業しかやることないのか」みたいな、第一次産業は非常に後ろ向きだった。だけどいまは、大学を出て、バイオテクノロジーなんかの知識も持って、「こういう農業をやろう」と田舎に帰る人がどんどん出てきている。水がきれいとか、キャベツが美しいとか、そういうことに価値がある時代なんです。

ただ、農の実際の流通を見てみると、自分たちの首をしめることを結構やっているようですが、産業として、ビジネスとして成功する可能性は高いと思っています。今後の地域というのは、かつてのように観光客に来てもらって土産を売ったり、にぎわいを提供したりすることよりも、これからは「農」というコンセプトでまちをおこしていったり、ビジネスチャンスをつくっていく時代になると感じています。

セーラ 同感です。小布施でも畑が年々減ってきていて、駐車場やアパートになってしまっていて、風景まで均質化してしまっています。これから古民家再生をやるうとするネックの一つは、材料費が高いことです。ワラ葺きやカヤ葺きに

ても、だんだん身近なところで育てていけないと割が合いません。

あと、左官屋さんの仕事が日本に少なくなってきたりしますが、年じゅう左官の仕事では成り立たないけれども、時としては畑の仕事、時としては壁塗りの仕事もするみたいな、マルチに働ける仕組みをつくれれば、それなりにうまくやる道が開けると思います。

青山 宮崎県の綾町は、三〇年前から有機の野菜づくりをしています。きちんとした野菜を産直で販売するという一方で、美しい自然と安全な野菜を目当てに大勢の人が訪れています。

高知県の檜原町は林業のまちです。林業は苦しいと言って手放しにしてしまうとだれも魅力には感じませんが、ここは森林認証をとって森林管理をして大切に守っています。きちんと手入れされた杉林はとっても美しい。そんなまちには林業後継者も来ています。農業も林業も、苦しいから手放してしまうのではなく、どう工夫して努力するかだと思いますね。

原 みんなが行かないところに産業のチャンスはあるんですよ。いまITとかは競争が激しく、そこに向かってあらゆる産業が集中していますが、それと同じくらいのエネルギーと発想のおもしろさを投入すれば、大いに成功する可能性があるはずなんです。そういう成功者たちが次々と出てくれば、地域の核としての「人」になるでしょう。

## 欲望の水準を上げる

青山 京都の美山町にカヤ葺き集落が二〇〇軒くらいあります。それは建物保存だけでなく、暮らしの中で息づいているから魅力的です。文化財として残しているだけではつまらないけど、住んでいる人が元気で、都会からも応援団がたくさん来ているそんなところには住んでみたいですね。

東京の国立市には有名な大学通りがあって、桜の名所です。その桜の木をメンテナンスしているのは市民なんです。この間も高層マンションを建てようとした動きに対して、景観にそぐわないとして低くさせた。住んでいる人たちの意識が非常に高いところで、そこに住むことに誇りが持てますよね。

セーラ でも現実的には、市民が自分の目の前を管理しようとする、「それは〇〇が管理するからだめだ」と言われるような仕組みが見受けられるんです。

今回の小布施でミニマラソンをやる一つの動機に、二二キロの距離を自分たちの力で掃除する、ゴミを拾う、ロードスウィーパーを借りて片づけるといった整備があります。そういうきっかけがないとなかなかやっちゃいけないみたいな雰囲気はまだ続いているんです。前例をつくらばあとは継続していくんでしょうけど。

青山 確かに今までのルールを見直すべき部分

は多いですね。ただ、いままでは、市民自身も国なり自治体が道路はきれいにしてくれるものだとまかせていた面があるんですが、最近はその市民も一緒になって歩道もきれいにしていきたいと思いますよという動きが全国的に出てきていますよね。ブロック塀を生け垣にしたり、庭の花や緑を道路から楽しめるようにしたり、行政と市民が一体となって動いています。そういう意識を持った人たちが住んでいるまちは、訪れたときにとても気持ちがいいんですね。まちの景観は、行政も市民も含めて住む人の心の現れであり、個人の暮らしと地域を通して見ることが大切でしょう。

原 それと、日本人の生活の欲望の水準を上げていくようなことも必要なんです。一億三〇〇〇万人という人口はローカルといってもかなりの数ですよ。知的水準もまあまあ高い、文化的なことでもまあまあわかっていて、ただ何がまだまだ足りない。それはたとえば、自分たちの外壁や屋根、生活環境、電線一つケアで

きないみたいな、要するに、生活の質に対する欲望の水準が低いところに問題がある。

確かにセーラとかがやっていることはものすごく重要なんです。それはある種外科手術的なところがある。要するに悪いところに手を下して直す。それに対して僕らのプロとしての役割は、日々の仕事の中でやっていくデザインが重要で、これは日本のマスに対してボディブローのように効いていくはずの活動なんです。つまり、一般の人たちの欲望の水準に影響を与えるビタミン剤のようなものだと思います。

セーラ 私はやっぱり新しい職人の育つまちのあり方とかシステムがこれから絶対必要だと思います。左官屋さんとか、昔ながらの手法でやりたいと思っている人は結構いるはずなのに、そういう手段を持っていません。ものをつくる人の感性からまちの新たな感性も生まれてきます。極力、若いときにいろいろなスキルを身につけて自分の可能性を伸ばしてほしいです。

青山 セーラさんのように、夢と実行力とプロデューサー力のある人が、もっと日本が増えてくれば「住んでみたい」素敵なまちも増えてくるんでしょうね。原さんにも、ぜひプロとして、日本の内側に効くビタミン剤になってさらに活躍してほしいと願っています。

ありがとございました。

(六月十日／構成・編集部)



マラソンポスター



特 集 こんなまちに住みたい  
～人がまちをつくり、まちが人をつくる～



# スローなまちづくり



東京農業大学 学長  
 進士 五十八

## スローフードのルーツ

私は今春、『「農」の時代』（学芸出版社、二〇〇三）を上梓した。サブタイトルは「スローなまちづくり」である。ファーストフードに対するスローフードの現代的意義を重ねて、これからの「まちづくり」のあり方に一石を投じたいとの気持ちから、この本を出したのだ。

およそ、現代人たちは悲しく貧しい衣食体験しか持たされていない。自らの手で、自らのために、自らの衣食住をつくるなどということは、極々まれな人にしか許されていない。

衣はユニクロに任せられ、食はファーストフードレストランに任せられ、住はプレハブメーカーに任せられている。家は建てるものではなく、買うものになってしまっている。

工業化社会、「効率第一」社会の都市づくりは、衣・食どころか、学びの文化までもこの物差しで計量しようとする。

そんななか、人間の中の生物性が目覚め、本来的な人間生活とは何か、本来の衣食住を取り戻そうではないか、との運動を芽生えさせたのである。

スローフードとは、①その土地の産物であること、②質の高い素材であること、③その土地の風土や風習に合った生産法であること、④その土地に活気を与え、郷土の社会性を高める食品であること。こうした四条件をみたした料理を、家族や友人などといっしょに食べることによって、自分と他、人間と自然との関係を問い直そうという運動である。

日本でも昔から「地産地消」とか「身土不二」とか言われてきた。「有機農業」とか「オーガニック」、「パーマカルチャー」など似かよった思潮があり、ある種の自然回帰、田園回帰。例えば、アメリカで二十数年前から言われている「ネオ・ルーラリズム（新田園主義）」とか、古い市街地の良さを見直そうという「ネオ・アーバンイズム（新都市主義）」。また「環境共生都市（エコロジカルシティ）」、「コンパクトシティ」、「環境循環型社会」など、みな同じ方向にある新たな動きである。

スローフードの四条件は、二十世紀をリードした「工業的思想」が排除してきたことを回復しようということであるから、ひと言でいえば、「農の思想」の再評価、「農」の発想による都

市再生、ライフスタイルの再構築をめざす動き、ということになる。

二十世紀主流の「工と都市の論理」は、ファースト、効率の高さこそ善というものであった。こうして世界中が、農村を都市化させてきたのである。

二十一世紀は、前世紀が失った人間性や生命性をとり戻すべく、「ひとと農の論理」を復活しなければならぬ。スピードも緩やかに、スローの価値を認めること。ヒューマンな適正幅のスケールに納めるべく工夫すべきだということである。

そのことを私は「二十世紀は農村の都市化をすすめたが、二十一世紀は都市の農村化をすすめなければいけない」といい、これを「農」の時代と呼んでいるのである。

## 二十一世紀は「農」の時代

「工」の時代の特徴は、高い生産性にあつたが、そのためには部分効率、特に経済効率を究極まで追求しようとした。

ということとは、「農業」のように手間のかかることはほとんど外部化、すなわち輸入にたよるということ。例えば日本は、一九六〇年約八〇パーセン

トあった食料自給率が、現在では四〇パーセントを割るという状態である。ヨーロッパでは「食」は国の基本、という考え方で、例えば四六パーセントまで下がった自給率をイギリスでは一九九八年約七八パーセントまでに戻している。

これは自給率だけの問題ではない。かつてE.Uの委員長だったドロール氏いわく「通貨より重大なのは農業です。農業は、文化ですから」。英語で農業はアグリカルチュア、園芸はホーティカルチュア、樹芸はアーボリカルチュアで、確かにすべてカルチュア(文化)である。

文化とは、カルチュヴェート(cultivate 耕す)からくる。気候風土、場所により土により耕し方はちがう。文化とは、その土地、その地方独自のもの、その土地固有のスタイルを指すから、その地方の人々にとつてのアイデンティティ。今さら言うこともないが、都市は人工化し、景観をも画一化してしまった。都会人はアイデンティティ喪失に陥ってしまいつつある。人々は当然のことながら「私らしさ」同様「私たちの町らしさ」を希求して止まないものなのである。

「農」は、人々や地域へのアイデンティティの総体を表現する総合的概念である。環境空間や生産手段としての「農地」。産業としての「農業」。人材としての「農民」。地域コミュニティの単位であり、地域の歴史文化の伝承ユニットとしての「農家」。その集合としての「農村」など、私が「農」と書くのは、これら全ての総合的意味を包含したものとしてである。

「農」は経済的(エコノミク)行為でもあるが、文化的行為でもあり、環境保全的(エコロジカル)行為でもある。現代都市では、それぞれがバラバラである。

私は、人間の生存に不可欠な衣食住はもとより、文化・芸能・芸術にまで及ぶのが「農」というものであると考えている。「農」は農暦にもとづく年中行事、祭事、神事は凡そフィジカルなものから、メンタルかつスピリチュアルな分野まですべてを含む概念である。それはまた、現代都市社会に最も欠けているもので、ホントウのまちづくりを叫ぶ場合、最も強く意識されるべきものだというところでもある。

ところで、部分効率主義の工学の論理、それにもとづいて造られたこの「工と都市」が卓越したために惹き起

されたのが、資源の大量消費型社会であり、地球環境問題である。

これを具体的かつ実践的に解決し、人間性を回復するのは「農」の思想と方法しかない。これからは、工業と都市に、「農」と「自然」と「エコロジー」の思想と技術を取り戻さなければならぬ。

ちようどスローフードの四条件を、まちづくりの四条件に置きなおして考えればよい。

地場材料を生かし、地方技術、在来工法や伝統工法を尊重し、周囲の自然環境や歴史的景観との調和と連続性を確保する。そういうスローなまちづくりの実践が始められるべきである。

### ルール・ランドスケープ・デザイン

私はかつて、横浜、神戸に始まった「アーバン・デザイン」(都市設計)に或る種の危惧をもった。道路の隅々にまでレンガタイルを張り、ストリートファニチュアで飾る表層的デザインに疑問があった。第一に透水性の無さ。水循環から生物生息までエコロジー配慮の欠如。第二に、画一的な工業製品

の多用、汎用により地域性、郷土性を完全に喪失させることであった。

アーバン・デザイン技法が、郷土色

と自然色の充実した地方都市をも支配する潮流に危機感をもった。そこでアーバン・デザインへのオルタナティブを提案することにした。コンセプトのみならず、技術的方法までを提案しなければ、まちづくり関係者を説得できないと考え、研究の成果を『ルール・ランドスケープ・デザインの手法―「農」に学ぶ都市環境づくり』(学芸出版社、一九九四)と題して公刊した。

ルール(Rule)は、田舎の、田園の、という意味だから、田園景観デザイン手法。私風には「百姓のデザイン」。すなわち、かつての農村が、その土地の地形、地質、水利、植生、気候、風土、地場の材料を生かした地方技術で、その土地に最もふさわしい、自然共生・環境共生・地域共生デザインとして成り立っていたこと。災害にも強く、周辺の自然とも調和した、営農(エイノウ)効率や生産性をも程々に配慮し、サステイナブルな環境デザインを実現したことを、改めて評価しなおし、ここから都市環境の本来形を学び直そうという提案をしたのである。

かつての農村は、人馬のスケールで出来ていたから、農地のサイズも農村

のサイズもヒューマンスケールに納まっていた。

自動車に合った形とスケールのニュータウンでは、どうしても歩行者は疲れる。農道はずか一米ートルのレベル差をつなぐにもカーブを採用して斜度を緩やかにしている。荷を担ぐにも肥桶を積んだ荷車にもその方がよかつたからである。長さ、広さ、斜度、いづれもがヒューマンスケール（人間の尺度）で構成された空間。それがルール・デザインであった。

農村景観は、一軒一軒の農家はもちろん屋敷林、さらには水田、畑地、果樹園、山林まで、そのすべてがその土地に産出する植物、岩石、土などを活用して造られている。岡山地方にゆくと花崗岩がつかわれるし、宇都宮地方にゆくと門柱から土蔵まで大谷石おびしである。千葉や伊勢の海岸線立地の集落では、イヌマキの高垣が続く。

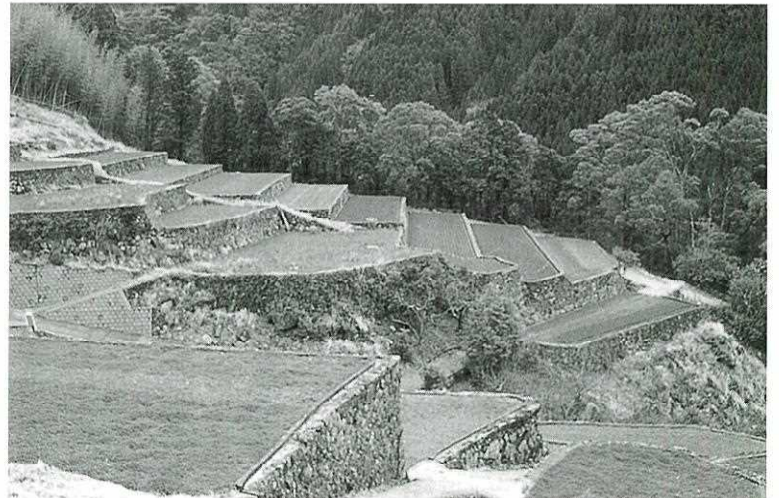
いづれにせよ、同じ瓦、同じ壁、同じ垣根が連続するルーラル・ランドスケープは「統一」され、なおかつ「地域らしさ」がある。絶えず新製品が使われて混淆とするタウンスケープとは大ちがいだ。

柵田を造るには、ころがっている石

を端に集め柵状の石垣を積むことから始まる。大小、形も様々な石を積むのだから空隙が出来る。これが動植物の生息には具合がいい。ニッチだらけの石積、ニッチだらけの農家回りの構成は、いまで言うビオトープである。土地利用も、森あり、農地あり、水面ありで、多様性に富むし、動植物の生育場所にも事欠かない。エコロジカル、循環系の見本のような場所が、里地里山といつてよい。

「遠野物語」には、東北の精神風土がよく出ている。いまの世界はニューヨーク、ロンドン、東京で同じファッション、同じ食べ物当たり前前に流通している。人間は、世界共通の「文明」の恩恵に浴しつつも、自らの個性、自らの拠りどころであるわが家、わが町、わが国の「文化」の中にいたいと願う。遠野の人たちは、遠野的なものにアイデンティティと豊かさを感じてくらししてきたし、これからもそれを失うことは耐え難いはずである。

私は四〇年前から、私共の大学の造園学科生に「私の原風景」と題するレポートを書かせてきた。自らが育った



幼少期の人間関係を含めた環境と、そこでの思い出や感動をキチンと思いきこし自覚させるためであった。

多くのユーザーに環境や自然からの感動を与えるべく環境をデザインしようという造園家は、一体どのような自然や環境にひとは感動するのか、ということをわかっておくべきだと考えたからである。

かつての農民たちの豊かな生活と人生を求める知恵、いわば「百姓のデザ

イン」の思想と方法を、現代に応用することでホントウの人間都市は再生されると思っているのである。

## トータルマン・「百姓」めざせ

自然環境の保全、地域文化の保存、地場産業の振興など、農村地帯はもとより地方都市のこれからの課題は少なくない。

しかし、そうした課題を解決するための諸活動を、市民・NPO・企業・行政のコラボレーションですすめるとすれば、課題解決の目的を達成する以上に関係者の活性化、マンパワーの発揮という大きな目的をこそ達成できる。

これからの時代、むしろ最も重要なことは、このことではなからうか。

まちづくりに人々が参加する。参加した人々は、まちづくりに参加したことで自らを元気にし、仲間をつくり、目的を達成し、生きる喜びを手にすることができる。

私の考えでは、人間は生まれながらにしてたくさん能力を持っている。それを十分に発揮しないと生きていけなかったのが、昔の農民、すなわち「百姓」だったのではないか。

文字通り、「百」はたくさん。「姓」

は苗字、苗字は職業、職業は能力。「百姓」とは、たぐさんの能力をもっていないと出来ない仕事。またそれをするひと。それが私流の「百姓」の定義である。具体的に説明してみよう。

「百姓」は、先ず土や肥料について熟知していないと出来ない。石灰を入れて中和したり堆肥を入れたりと化学的知識をもっていた。地形をいかして圃田を拓き、水を落として灌漑を施し、

石を積み、農道を通す土木的知識をもっていた。日照、卓越風を理解して、屋敷林、住居、植栽をデザインする環境工学的知識をもっていた。早稲、晩稲のモミ選択は、気象気候の知識をもっていないとできない。自分の身体寸法にふさわしい農具を村の鍛冶屋で打てる。一番効率のいい道具を考える人間工学的知識をもっていた。微生物の力を利用して発酵食品をつくるバイオ技術もあった。赤いダイヤといわれた小豆相場にあるように経営、ビジネスセンスも必要であった。祭礼や村運営の世話役は、今風のボランティアリーダー。村社会を持続するには、こういう資質も備えていなければやっていけなかった。

以上、百姓は、文字通りたぐさんの

能力を発揮して生きてきた。否、生きるために、それだけの能力を必要としたのだが、それがまたひとりの人間の持つポテンシャルを最大限発揮させることにもなったのだ。

いま私たちが「百姓」らしく生きようということは、自分自身を完全燃焼する生き方を選ぶのではないかということである。それが生き甲斐というものではないか。

現代人が、ほんの二つ三つの能力を発揮すること、例えばプログラミング能力だけでコンピュータ会社からサラリーをもらう、自動車を動かす能力だけのドライバー、経理だけにつよい会計担当、いろいろの場合はあるが、多くのスペシャリストはほんの一分野だけでサラリーを手にするのみである。親からももらった他のほとんどの能力は発揮する機会もなく死んでいく。それが高度分業化社会のサラリーマンの宿命かもしれない。ジョギングに精を出す知能労働者の姿からは、サラリーなしても、自分の持っている他の能力を発揮しようと必死の姿勢を感じる。

私が「まちづくり」に参加しようと呼びかけるのも、四〇年も前から『緑のまちづくりボランティアの手引』

まで制作して、これを推進してきたのも、この宿命からの脱却をめざすためには「まちづくり運動」や「ボランティア活動」に参加するのが一番だと思っただからである。

実際、私がつきあっているNPOや市民グループのメンバーは凄い。組織の中のサラリーマン型ライフスタイルと決別することを念願してきたかのような変身ぶりだ。

主体的に、自主的に、積極的に、行動的に、なおかつ人間的に、ホントウに生き生きと輝いている。多様な前歴、職歴、経歴のメンバーたちが、そのすべてを認めた上で、NPO市民組織の活動目的に賛意を示し、参加協力する姿は、実に美しい。

「都市再生」「自然再生」の言葉が舞う。しかし一番大切なことは「人間再生」ではないか。

近代化、工業文明化の中で、機能性、効率性だけが追求され、ひとりひとりの個性あふれる人間力の総合力で活力を生むという考え方がしぼんでしまった。分業化の中でトータルマンの生き方は否定されてきた。

これを反省し、ひとりひとりの創造力や行動力を引き出し、発揮しやすい

サブシステムを創りサブカルチャーを育てることも重要である。

生物としての人間。社会を構成する人間。仲間と共に何かに取り組むたい人間。創造力を発揮したいと思っっている人間。成長発展、進歩進化したいと願いつづける人間。そういう人間性を、十分に育み発揮できる舞台として「わが町」「わがふるさと」をいかに造るか、「私たちのライフスタイル」をいかに創るか、これを追求しようというのが「まちづくり」である。

ひとりの市民として、或る種の専門家として、ひとりの行政マンとして、企業家のひとりとして、その課題と関心も、あるひとは福祉をテーマに、あるひとは環境をテーマに、またあるひとは健康をテーマに；色々のアプローチが始まる。スローに、ヒューマンに。しかし、生き生きと元気に。私たちが編集した『環境市民とまちづくり』(①自然共生編、②環境共生編、③地域共生編の全三巻、ぎょうせい、二〇〇三)に登場する市民、専門家、行政マンの活躍ぶりと充実した自分史には目をみはるものがある。

もうすでに、各地でスローなまちづくりは始まっているのである。



# 町歩きの愉しみを一

## 私の「こんなまちに住みたい」論



建築家・詩人  
 渡辺 武信

### 「落合秘境」の 名残り近くに住んで

生まれは横浜だが、二歳のときから東京の目白に移り、以来、戦時中の疎開の期間を除いてここで育って、結婚しても親の敷地内に住まいを建てて暮らしているの、わが家の周辺にはそれなりの愛着がある。ここは法律的に

言うと「第一種低層住宅専用」という最も厳しい建築制限が適用される用途地域にあり、容積率、建蔽率が低く設定され、建物の高さも一〇メートル以下に抑えられている。かつての、いわゆるお屋敷町だった頃の雰囲気は高度経済成長期以降、低層マンションが混在し始めてから、やや失われているが、前述の高度制限によって三階以上の建物は建たないから街路に圧迫感が生じることもない。ずっと目白に育ったと記したが、より厳密に言うと、私の家族は一九五一年に同じ目白でも、もっと駅寄りの場所から現在の敷地に移ってきた。今では考えられないことだが、その頃は付近一帯は戦前の貴族から東邦生命保険が買い取ったまま、ほぼ空き地になっており、住宅はポツンポツンと点在するような状態だった。道路

は舗装されず、上下水道もなかった。電力と電話は引き込めたが、給水は敷地内の井戸からポンプアップして配管して、下水は浄化槽を経過して側溝に放流していた。こういう状態だから駅に近い家屋敷を売却して、一段と広い僻地を購入してもお釣りがきたと亡父から聞いている。

またここは目白台から早稲田、高田馬場方面に下る斜面にあたり、付近には「相馬坂」など古くからの名称を残す坂道が多い。「相馬」とはこの地が明治以来、終戦まで相馬中村六万石の大名の後裔、相馬子爵の屋敷であったことに由来する。そうした斜面の一部に低い部分が切れ込んで峡谷状になった場所があり、緑に覆われた谷底には清流と池があつて「落合秘境」と俗称されていた。そこは一九五〇年代に半ば埋め立てられ、一部は古河電工に買い取られて社宅が建てられ、また一部は三井不動産を経て国有地となり公務員住宅が建てられてしまったが、一九六九年、美濃部都政時代に、付近の住民が、今流に言えば「環境保存」を時の大蔵大臣、田中角栄に陳情した結果、池のある部分が国から都に無償貸与され、都立の「おとめやま公園」となっ

て残された。なお公園の名称にある「おとめ」は「乙女」ではなく「御留」の字をあてる。それは、この地が相馬子爵邸の敷地となる遙か前、八代将軍吉宗時代に将軍家専用の狩猟地で、動物植物の採取はもちろん庶民は立ち入りも禁止、つまり「お留め」であったからだ。当時の「お留め山」は山手線を超えて雑司ヶ谷まで及んでいたそう

で、その広さは想像に絶するが、東邦生命が所有していた時期でも八千坪余あつたという。公園として残されたのはその半分強の四千五百坪である。  
 「おとめやま公園」では虫を養殖して、日を定めて夏の夜に放ち「ほたる祭り」を催すので、そのときは賑わうが、普段は閑散としていて、池畔を逍遙したり、道路を挟んで東側にあるもう一つの池の岸辺にある四阿に座してぼんやりと時をやり過ごすのには理想的な場所だ。この種の公園として都内には新宿御苑や清澄公園などがあるが、それらに比べて遙かに小規模とは言え、自宅のすぐそばにあつて、清らかな水辺と豊かな雑木林に日常的に接しられる機会を持てる嬉しさはまた格別で、それだけでも私が自分の住む町を愛する理由になる。



## 生産優先の大都市、東京

しかし私が自分の住まいを含む広域である新宿区、あるいは東京都をどう思っているかと言うと、そこには愛着もあるが、私が好きな海外の大都市、たとえばニューヨークやサン・フランシスコやパリやヴェネツィアに比べると、一段と見劣りがする感を免れない。はつきり言つて東京には大都市の魅力が薄い。それは景観において特に顕著である。都市の顔とでも言うべき中心部については、銀座から日比谷へ、そして丸の内・三ツ菱地所による煉瓦街（低層部の雰囲気を残しつつ高層化された丸ビルを含む）に至る街路だけは一応合格だが、その他の都心部、典型的には新宿西口の副都心に群立する高層ビルは、マンハッタンの中心の高層ビル群に比べると、後者がアール・デコからインターナショナルリズムまでさまざまな様式が妍を競いつつも全体として統合された都市美を醸し出しているのに対して、前者（新宿副都心）はテンデンバラバラの印象しか与えない。

新宿副都心は、一九七〇年代になってから淀橋浄水場の跡地を再開発して建設された比較的新しい市街である。浄水場が廃棄された直後の一九六〇年代には、駅西口の周辺のバラック街を過ぎれば見渡す限りの空き地であり、最低限のグラウンド・デザインとでも言うべきものが（具体的に言えばスカイラインと建物の向きを統一する規制が）ありさえすれば、本当に副都心と呼ぶにふさわしい街として創りあげることが出来たはずだった。ところがグラウンド・デザインを欠いたがゆえに今のような惨状になったのではないか。こうした事態には、それらの建物を、グランド・デザインの欠如に無感覚なままに、ただおいしい仕事のチャンスとしてのみ捉えて、設計し施工した建築家やゼネコンの無節操さにも一半の責任があるろう。

私がはつきり記憶しているのは、西口の最初の超高層ビルである京王プラザ・ホテルの鉄骨が、赤錆びた色合いをし、広野の彼方にポツンと建ち上げられた頃の光景である。この光景は天折した天才監督、藤田敏八の初期の傑作『野良猫ロック・暴走集団'71』に鮮やかに記録されているが、そこには何か新しいものが生まれつつあるという希望が感じられたし、右の映画と同じ頃、つまり一九七〇年代の初頭に、唐

十郎の率いる劇団・状況劇場が、警察の取締りをくぐり抜けつつ赤テントの仮設劇場で何回かの公演を打ったのも、何か新しい都市性のようなものが生まれることを予感させる出来事だったが、その期待は結局裏切られたのだった。

新宿副都心とマンハッタンの差を具体的に述べると、マンハッタンの中心街では地下鉄に乗らずにかなりの距離を歩くほうが楽しいが、新宿の西口からは、ホテルとしては好きなパーク・ハイアットや、建築設計の情報拠点の一つであるリビングデザイン・センター・ONEへ歩いて行くのはちっとも楽しくないので、ついシャトル・バスを利用してしまふのだ。新宿東口や渋谷、池袋の映画館を中心とする盛り場、六本木から芝に至る街路も、建物のファサードがバラバラで、ニューヨークの五番街やパリのブルバールのような都市美に乏しく、個々には好きな店や施設があるものの、そぞろ歩きが楽しいという感じはなく、早く目的地に着きたいという気分が濃い。

そうなるってしまった原因は戦後の東京復興にグラウンド・デザイン的な要素、つまり都市美をいかにして確保するかという構想が欠けていたからではないか。銀座から日比谷、丸の内にかけての街並みが何とか統一感を保っているのは多くの建物が戦災を免れ、明治以来のグラウンド・デザインの残映が支配していたからではなからうか。

一九三八年生まれで終戦時に国民学校二年生だった私は戦前の、そして焼け残った終戦直後の銀座、日比谷の記憶がある末代にあたるだろう。終戦直後、東京の大部分は、幼い私が住んでいた目白駅周辺も含めて赤茶けた焼け野原になったが（私自身の家は坂の上にあつて坂下で延焼が止まったため、焼夷弾を一発食らったものの何とかボヤの段階で消し止めて、辛うじて焼け残った）、丸の内から日比谷銀座にかけては、丸ビルもGHQ司令部として接収された第一生命ビルも、日劇も朝日新聞社も服部時計店（今の和光）も残っていたし、日劇と朝日新聞社が建て替えられても、そのスカイラインはどうやら昔日の面影を今日まで保っている。ただし戦後に河川は埋め立てられ、ラジオドラマとその映画化がヒットした『君の名は』の重要な背景であった数寄屋橋は石碑一つを残して消滅し、その頭上を首都高速道路が都市景観を冒瀆するように横断している。首都高

速は東海道五十三次の起点であった日本橋の上にもさばって許し難く景観を破壊している。首都高速は、大戦後の日本が、明治以来の富国強兵政策の「強兵」の部分を切り捨てて、国力、言い換えれば国民の税金、全てを経済成長の基盤となる生産力優先のインフラにそそぎ込んできた結果の典型的な表れの一つである。

思えば明治人には、三菱財閥の祖である岩崎弥太郎にせよ、彼が雇って煉瓦街を設計させたコンドルにせよ、その直弟子で東京駅を設計した辰野金吾にせよ、政府の富国強兵政策の一環を担った結果とは言え、新しい国を作り上げ、東京をロンドンやパリに張り合う首都とするためにはグラント・デザインを必要とすることを承知しているだけの気配りと気概があった。それは当時の「富国強兵」という概念には単なる経済力と軍事力だけではなく「国威」と言う要素も含まれていたからだろう。丸の内、日比谷、銀座以外の盛り場の大部分は戦災で消失し、戦後の復興は建国の気概を欠いた民間企業に任され、都市計画法と建築基準法という、およそ都市美には言及することなく、経済的効果と安全性だけに配慮し



(写真1) 青山通りの乱雑なスカイライン。右側の新しい高層建築がMaxMaraのショールームでその向かい側に(この写真では見えないが)グルメ食品の老舗、紀伊国屋の2階建てビルがある。

た法律に従いさえすれば、どんな形の建物でも、自社ビルを周囲から際立たせるなど、それぞれの勝手な思惑によって建てるのが許された結果として、賑やかでも情緒のない、醜い街並みが形成されてしまったのだ。国造りにヴェイジュアルな・かたち・を与える基礎となる都市計画法と建築基準法は憲法が含んでいる・理想・という要素を欠いた索漠たる実務的法律である。

具体的な例をもう一つ挙げれば、青山通りもグラント・デザインを欠いた結果を反映している。私の所属する日本建築家協会は青山通りから外苑西通りを西側にバスで一駅だけ入った神宮前二丁目にあるので、この二つの基幹道路を歩くことが多いのだが(後述の

ように健康上の理由もあつてなるべく地下鉄やバスを使わずに歩くことになっている)、このあたりは画廊やファッション産業のショールームなどの文化的な香りのする建物が数多く建ち並ぶにも関わらず、スカイラインの統一感が欠けている。特に青山通りにはベル・コモンズやスパイラル・ホールなど、現代建築の傑作と見なされ、アイ・キヤッチャーとなるような建物が存在するにも関わらず、都市景観としては実にまともが悪く、とくに南青山五丁目の交差点付近は、新しいマックス・マラーの高層ビルと低層の紀伊国屋が向かい合っていて、それぞれの建築は

決して悪くないのに互いに調和していない。ニューヨークやロンドンの中心街のスカイラインの揃った街並みと比べると、その優劣は無惨なまでに明らかである(写真1・2)。

## 都市に不可欠な歩く愉しみ

ここでいったん、話が私的な些事に迷い込むことをお許しただければ、私はここ数年、毎日のように長めの散歩にいそしんでいる。というのは毎年の定期検診で中性脂肪の血中濃度が高いと診断され(ただし総コレステロール値は正常範囲)、医者にもっと運動してくださいと言われるのだが、若



(写真2) ニューヨーク五番街

い頃から読書と映画演劇鑑賞を趣味としてきて、スポーツを一切嗜むことがなかったので、ゴルフにもテニスにも無縁、金槌ではないが泳ぎも苦手なスポーツクラブのプールに楽しみを見出す事も出来ず、仕事時間の大部分はかがんだ姿勢で設計図を描くことに費やしてきた私には、腰を伸ばし

て歩くこと、つまり散歩しか対応できない運動がないのだ。服装も歩き易いように、普段はよほどの必要性がない限りスーツ、ネクタイ、革靴は避け、春夏はジーンズにTシャツとブルゾン、秋冬はコーデロイのパンツにスエーターと裏地にダウンが入ったハーフ・コートで、足元は常にスニーカーか甲は皮革でも底はゴムのウォーキング・シューズにした。こういう服装と足拵えだと、散歩ではなく用件があつて都心に向くときでも地下鉄の二駅ぐらいは軽く歩いてしまう。例えば築地のソニー・ピクチャーズで試写を見た帰り、日比谷線の築地駅から地下鉄に乗れば茅場町で東西線に乗り換えて高田馬場にいたる経路で早く帰宅できるのだが、そうはせずに東銀座、銀座を経て有楽町まで歩き、山手線で帰ることが多い。このルートは松屋のグッド・デザイン・コーナーや文房具の伊東屋、旭屋書店などに立ち寄ると、時間は費やすが退屈しない。

どうせ歩くなら愉しく歩きたい……ということから「こんなまちに住みたい」という課題に戻れば、私は愉しく歩けるまちに住みたい。そして一般常識に反するかも知れないが、都会人は

田舎の人よりよく歩くのである。最近見た『ホーム・スイートホーム・2』

(二〇〇三・栗山富夫監督) という映画には、そのことを改めて認識させてくれる印象的なシーンがあつた。主人公は大手商社でエリートコースに乗っている秀清(柴田恭平)で、彼が取締役になって海外支社の統括に赴く直前、故郷の愛媛県今治市郊外に残つて家業を継いでいる妹から、悠々自適の隠退生活を送つていた父(財津一郎)が高齢によるまだらボケで徘徊を始めたという連絡が入る。秀清は父との関係があまり円満ではなく、故郷を捨てたつもりでいたが、妹に強く訴えられると仕方なく、泣く泣く父に辞表を出し、受験勉強中の息子や娘と妻を東京に残したまま、いわば单身帰郷する。故郷には幼い頃から高校時代までの遊び友達が数多く残つていて、徘徊して行方不明になる父の捜索にも「ありや俺のオヤジみたいなんじゃ」などと言つて協力してくれる。この映画は、故郷の友人達の存在のおかげで介護という重たい問題に救いがもたらされ、暗くなりがちな物語を真摯さを失わずにユーモラスに描くことが許されて、かつ介護における近隣の間関係の重要性

を再認識させる点で、時流に適合した佳作といえよう。

映画全体の評価は以上にとどめ、「歩くこと」に話を絞れば、今治という地方都市のそれも郊外では農耕は機械化されているし、家と家が離れて散在するので、皆が車で動く。そういう環境に暮らす人はしばしば都会人より足腰が弱い。徘徊中の父を捜して野山を歩き回っているとき、地元の義兄のほうが先に息があがつてしまい、一向に平気な秀清に向かつて「東京の人はよく歩くからな、むしろなんか煙草買に行くのも車だろ」と言うのだが、この台詞にはリアリティがあつた。私の職業上の体験からしても、地方都市の医師など中流上層階級の住宅を設計すると、必ず車を二台、場合によっては三台収容する車庫を要望される。そういうところでは夫が車で通勤する他、専業主婦も自分の車でショッピング・センターなどに日常の買い物に行き、ティーン・エイジの子供にも中古車などを与える場合が多い。このような地方では、車が決して贅沢ではなく、住む環境からして必要不可欠な道具なのだ。私の知っている範囲では、ニューヨークは少なくとも都心ではあまり車を

運転しないでタクシーや地下鉄に頼り、元気な人はかなり長距離でも気楽に歩く。西海岸に目を向けると、サン・フランシスコがニューヨーク的、つまり都会的であるの対し、ロス・アンジェルスは都心でも街並みが拡散的で車なしには暮らせない街であり、その意味で真に都会的ではない。

私にとって都市とは「歩き回る」場所であり、そうすることが楽しいことではなければならないはずの場所なのだ。もちろん大都市では市内の要所をつなぐ電車、地下鉄、バスなどの公共交通機関が整備されていなければならないが、そうした交通機関でしかるべきポイント、例えば私にとっては先述の築地、に達すれば、その周辺一帯は愉しく歩ける場所ではなくてはならない。

## 失われつつある路地の魅力

二年前から自宅の一部を改装して、そこに設計室を移したので、うっかりすると一日中外出しないまま終えそうになることがある。そういう日、私は夕刻から散歩に出かける。ところが自宅の周辺は、前に記したように第一種低層住居専用地域で、公園もある点では恵まれた環境だが、散歩して愉しい



# ユニバーサルタウンをめざして

~感動を生み、感性を育むまち~



国際プロダクティブ・エージング研究所  
 代表取締役 **白石 正明**

## 『住みたいまち』とは？

全ての人の願いを充たすまちはこの世ではあり得ません。また長い人生では「願い」そのものも変化します。とすれば、キャンピングカーや船の生活がひとつの理想となるかも知れません。何時かこういうライフスタイルが主流となる日が来ても不思議ではないでしょう。

さて、「住みたい」と感じるまちは先ず五感に訴えてきます。視覚でいえば美しさ。とくに緑、花、街並み、海・山・川など自然環境。しかし、すべてのまちが自然に恵まれています。代わりに何を訴えるか？例えば清潔さなども。聴覚では騒音フリーのまち。代わりに川のせせらぎ、鳥のさえずり、鐘の音。時には元気な子供の声、そよ風の歌。触覚は温度、湿度、或いは足にやさしい土の道と芝生。アーケードの路面を「木道」にした商店街が熊本市にあり、その発想には感動します(写真1)。水辺のボードウォークも増えてきました。繊細な足の感覚は無意識の世界で、まちの快適さを感じと記憶しています。嗅覚は視覚障害の人には道標ともなります。四季を通じ



(写真1) 足の記憶はあの商店街がいいと深層心理にささやく

花や木の香で飾られたまち。香の記憶は時空を超えて蘇ります。まさにまちを印象付けるウルトラCです。日本のまちは魚と醤油のニオイがする、と外国からの人が言ったとか。味覚はその地の歴史、気候風土を学ぶ最適のテキスト。全ての感覚を動員するのは味覚だけです。まちの「顔」となるパワ―を秘めています。

しかし五感だけでは十分といえませんが欲しい。人間の本能や価値観に合致する、多くの人が求めてやまない本質的な欲求。例えば、驚き、感激、感動、

安全、健康、畏敬、感謝など。これらに加えて文化・社会的な環境も『住みたいまち』のイメージを鮮明にします。人生のある時には子育てや教育、仕事の環境、あるいは情報や交通へのアクセスなどが優先されるでしょう。

ここで見方を変えてみます。まちづくりをする方の立場、自治体です。まちづくりの対象として先ず次の人々がいる人、そして未来の世代です。また、自治体はコミットメント(使命)を持っています。人の一生は精々百年ですが、まちは永遠に生きねばなりません。二〇〇六年をピークに日本の人口は下降に転じます。二〇五〇年には二〇%を超える減少となるとすれば、まちの持続的発展は脅かされかねません。まちづくりの真価が問われる今こそ『住みたいまち』のビジョンと、その依って立つ思想を確立すべきではないでしょうか。

## 百歳者が集い賑わうまち

二十一世紀は百歳時代、との予測があります。百歳者のイメージは変わります。サンフランシスコに住んでいたシドニーさんは、地元のレストランの

「人気者」でした。客を迎えテーブルへ案内する。給料を稼ぎ、税金を払っていました。年齢は一〇九歳！「ベツドから落ちなかつたらもつと働いていたのに」とまちの人々は今も残念がっています。超高齢社会は可能性大です。介護保険を大黒字にし、未来への遺産とする。高齢化＝介護という先入観をぶち壊し、大きなビジョンを掲げることがまちと高齢者の責任なのです。何か、への答えはアーミッシュの思想の中に見出せます。この土地は先祖から貰ったのでない。子孫から借りているのだ。この思想が『住みたいまち』づくりの母です。

## 『住みたいまち』 〜アメリカ人の場合

世界最大の中高齢者団体・AARP（会員数三五〇〇万人）の会員誌に「定年後に住みたいまち」の特集があります。二〇〇〇年五月号と今年の五月号。三年間の変化は興味深い。

先ず三年前は、自然環境、大学、人口など五分類で各十のまちを選びました。今回は単純に十五のまちです。評価はともに十項目ですが、内容は変わりました。就業機会と住宅コストが加わ

り、レストランや雰囲気などが落ちて堅実な生活志向が窺えます。共通項目は安全、医療サービス、市民意識、教育環境、公共交通、歩行環境など。

連続当選は九つのまちで、日本でも知られているのはサンディエゴくらい。支持理由は圧倒的にアウトドアレジャー。次いでまちの魅力で文化施設やショッピング。仕事の可能性や大学など教育環境が続きます。

従来の退職者が温暖な気候を求めた「サザン・ベルト」地域志向から、「静と動」両面の活動環境を重視するライフスタイルへの移行が起きています。つまり、豊かな自然の中でウォーキングからスキーまでの多彩なアウトドアレジャー、また生涯学習や文化活動に「こころ」を磨くという、チャレンジに満ちた新しい人生を創り出す「高齢新人類」が主役として登場しています。因みに、トップのフォートコリンズはロッキー山脈に抱かれたまち、二位のペリンガムはシアトルとバンクーバーの間。十五のうち六つはアメリカの北部か高地にあります。気候条件以外の新しい価値基準が顕著になっています。むしろ、逆転現象が起きていると言わべきでしょう。とすれば、日本でも地

方の時代実現への貴重なヒントが隠されているかも知れません。東北や北海道が浮上する可能性もあり得ます。

「日本は違う」との声があるでしょう。しかし、百歳を視野に入れた第三の人生を「大きな挑戦のチャンス」ととらえる姿勢はアメリカだけとは限りません。

## 「こころ」の時代へ

なぜ豊かな自然の中でのアウトドアレジャーが『住みたいまち』の第一条件になったのでしょうか？まず自然は挑戦、冒険の舞台でありそれを成し遂げたときの達成感、快感、感激、歓喜は爆発的に大きい筈です。

同時に自然は神秘、静寂、驚異に充ち充ちており人に深く広がる喜び、癒しそして畏敬の念を抱かせ、瞑想にも引き込みます。

こうした退職前は非日常的体験がごく日常の生活となったとき、人はどうするのだろうか？語りた、分かち合いたいとの思いが抑えきれなくなるでしょう。人間は社会的動物であり一人では生きられない、孤独と共に老います。だからこそコミュニティや集いの場を求めるのです。良いレストランはAARPの二回の調査を通じ『住みた

いまち』の当然の前提となっています。仲間との愉快な語らい、食欲も増し「明日もやるぞ」という好循環が起きてくることでしょう。

EU（欧州連合）の高齢化政策に生涯学習が登場してきたのは二〇〇〇年末でした。もともと欧州は生涯学習が盛んでしたが、知的挑戦が達成感や好奇心を高揚させることに加え、社会との繋がりを増大させることに注目しています。「社会的接触が豊かな人ほど元気で長生き」、これは内外の調査研究で立証されています。高齢期の心の健康増進に大学の大きな役割が期待されます。「心は身体の主なり」、こころが充ちているとき免疫力が高められるからです。

## 「感性」を育むまち

ここで具体例を考えてみましょう。愛情をテーマとすれば子育て。デンマークのあるまちでは公園づくりを優先策とし、子育て世代の転出防止対策としています。単に防ぐだけでなく、「私のまちは子育て環境が国で一番。引越しておいでよ」と親達が誇らしげに呼び掛けるだろう、と人口増の積極策となる可能性をも読んでいます。

人口増は必須条件ではありません。モノコは税金がない国として知られています。観光収入が豊かであれば「訪れたいまち」という選択肢も出てきます。同様に「働きたいまち」「学びたいまち」或いは「安全」という選択もあります。コペンハーゲンは三二年かけて、中心市街地の歩行者空間を六倍の九六〇〇㎡に拡大しました。市民も旅行者も排ガスや警笛のないまちの暮らしを楽しんでいます(写真2)。

「清潔感」に注目し清掃車のイメージを一新したデザインをご覧ください。場所はパリのシャンゼリゼ。この場所で違和感を覚えさせないデザイン、作業服もゴミ入れもグリーンで統一しています。「感性」の格差にはただ溜息(写真3・4)。

「感性」を育むまちは、子どもの未来を大きくします。『知性と感性が両方発達していかなければ、知性そのものがうまく機能しない』のです(利根川進著「私の脳科学講義」岩波新書)。自然の偉大さは、人知や時代を超えて生きる存在を悟らせます。人は畏敬の念を蘇らせ心を洗い清めることができます。「感性を育てるまち」は未来の住民、社会さらには国づくりを進めるまちで



(写真2) ゆとりある歩行者空間が広がる  
コペンハーゲンの街

す。たとえ街中でも自然の豊かさ、偉大さを目にし、触れ、感じる事が出来ます。中心部に数十本の巨樹があるまち、公園の遊具はすべて大木から作っているまちなど、生活の中で感性を豊かにする工夫は無限です。子供の透明な感性が「ホンモノ」を吸い取り虹色に輝くまちは、住民の誇りを大きく膨らませます(写真5・6・7)。

「健康」をキーワードに公園づくりもできます。憩いや触れ合いに健康増進機能を加え、誰でも、大人も子どもも気軽に楽しめる。高齢ボランティアが面倒を見ることも出来るでしょう。ここでも使うのはすべて自然素材。「百歳者のまち」もあるでしょう。

百歳者の生活館にはレストラン、生活の歴史や用具、趣味やクラフト、アート。百歳者シアターでは演奏やパフォーマンスなど。役割をもった百歳者たちが活き活きニコニコ。

問題は先ずお金。予算は有限、しかし智慧は無限です。智慧を集めること。そして「ホンモノ」、年とともに価値が磨きだされる企画は必ず物心両面の支持が集まります。寄付をして名を残したい人もいますのですし。次に山ほどの企画からホンモノをどう選ぶか？優先順位の決定は過去・現在の環境とビジョンによって決まり、そこにまちの個性が確立します。個性のないまちは滅びへの道を歩みかねません。舵を失っ



(写真3) 街の美化は清掃からというお手本



(写真4) 透明な袋に変なものは捨てない

た船から人は去り、店も消える。税金も落ち込み資産価値も目減りする。人々の笑いも消えることでしょう。

**『住みたいまち』づくりの実現に向けて**

未来の世代も住みたいまち、永遠に生きるまちづくりは、自治体と今を生きる我々のコミットメントです。自分だけの百歳人生ではない。この気付きが「住みたいまち」づくりの原点では



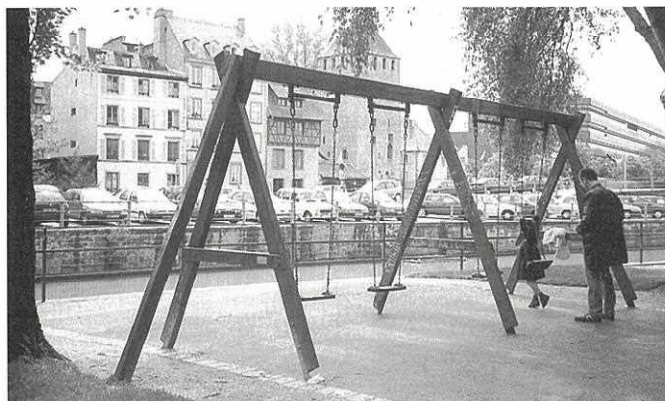
(写真5) ブエノスアイレス 大樹は市民の誇り、街の品格を高める

ないでしょうか。何故なら、私たちは数十万年の過去から未来へと続く人類の歴史の現時点に在るに過ぎません。子孫たちの歩みは永遠に続く。だからまちも持続的発展を続けねばなりません。沖繩の祖先崇拜は二五代まで遡るといいます。今は過去から未来へと視点を転換すべきとき。仮に八〇年人生、子どものダブリを半分とすると二五代で千年。西暦三千年にも栄えるまちと人には及ぶべくもありませんが、せめて二〜三百年は視野に入れる。近視眼的なまちづくりとの決別なくして人の心



(写真6) ストラスブルグ(仏) 木のぬくもりは四季を通じてやさしい

を動かすまちはできません。決別するとハード志向から解放されます。曾孫、玄孫たちから先の世代の生活や人生を人間本来の欲求、本能、願いなどをクロスさせて想像の翼を飛躍させることが出来ます。心理学、社会学、教育学、あるいは医学、宗教、文化、芸術、科学など全てを動員して近未来の生活を描き出す。生活の場としてのまちは結果として見えてきます。建築や都市計画の専門家だけでは真に『住みたいまち』は出来ないはず。アメリカ建築士協会(AIA)が一九



(写真7) ストラスブルグ(仏) 鎖と支柱の土台部分以外はすべて木製のブランコ

六七年に始めた「ルーダット」というボランティア・プログラムがあります。(R/UDAT=Regional/Urban Design Assistance Team) このプログラムは住民参加のまちづくりをAIA会員の専門家が支援します。特徴はその地域に利害関係のない関連分野の専門家をAIAが選んで派遣すること。まずAIAのプロジェクトマネジャーが地元を訪問し基本調査をし、チームメンバーを決める。チームはまちに到着すると住民からヒアリングを重ねる。提案作成と公開、住民による検討

会。再訪した住民との共同作業、修正—公開—検討のプロセスを繰り返すし、最終提案となるのですが、利害関係がないからこそ厳正中立の立場でまちの未来を描き出せるのです。住民も行政もすがすがしい満足感、達成感と誇りを心に刻み込むのは間違いありません。アクセシブル・シテイ宣言をしたサンフランシスコ市やユニバーサルデザインを取り入れたポートランド市などはその成果の代表例ですが、全米各地のバリアフリーのまちづくりに貢献しています。

二十一世紀は「こころ」の時代。人々の五感を突き抜けて、心の深奥に眠っている何かを揺さぶり起こすまち。大きな高いビジョンに挑戦することから人々の心に誇りが生まれ、結束が育ちます。まちと共に生き、街の歴史、文化、自然、生活や人間のニーズを熟知している住民が中心となり専門家が協力し、ともに成長の喜びを分かち合っていく。主張するだけの「従民」ではなく、思想とビジョンにコミットした「住民」が、永遠につづく未来の世代のためまず「住みたいまち」を。そして永遠に栄えるまちを実現させて行くではありませんか。



# 「町の意志」が感じられる町

## ～長野県小布施町～



江戸川大学社会学部 助教授  
 鈴木 輝隆

全国各地を歩いているが、地域経済の低迷や市町村合併で行く末を悩み、元気がない。国の合併論に迷わず、住民自身がしっかりと町の文化や歴史を見つめ、先端思想で自らを照射し、想像力と強い意志、継続性のある実行力で、「意志がある町」元気な小布施町を紹介したい。

### 小布施町の魅力を形成する 三つのキーワード

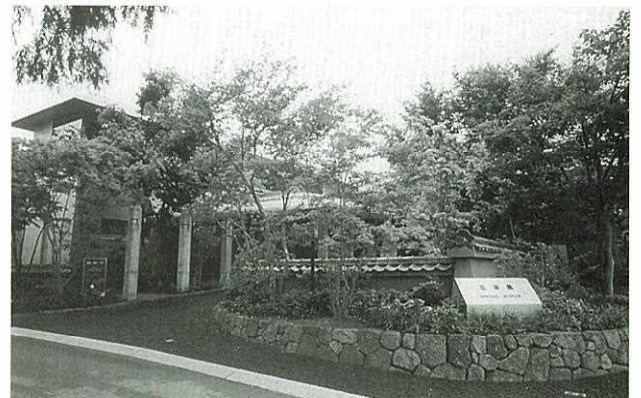
小布施町は、長野市中心部から十五km圏に位置する、総面積十九平方kmの平坦な農村地帯で、人口は一万二〇〇〇人。四半世紀前には小さな菓子屋が数軒の静かな田舎町であったが、年間約一二〇万人を超える人々が訪れる町へと変貌した。日本経済が十年以上も景気低迷が続く中で、小布施町は個人や組織、企業も着実に自らの魅力を深めている。伝統を守るだけでなく、「小布施は面白い」と、いつも変化し続ける革新性のある風土はなぜ生まれたのか、三つのキーワード「北齋」「小布施の栗菓子」「町並み修景」から探ってみよう。

#### 「北齋」

幕末維新期、小布施には、長野市松

代町の山寺常山や佐久間象山とともに、「信州三山」と称せられた知識人、高井鴻山（榭一市村酒造場十二代目・市村三九郎）がいた。京都や江戸に十六年間遊学し、三一歳で小布施村に戻った彼の元には、佐久間象山、勝海舟、大塩平八郎などの文人墨客が訪れ、一流の文化サロンが田舎町に存在した。鴻山は、葛飾北齋を招くためにアトリエ「碧漪軒」を建て、北齋は、八三歳（天保十三年一八四二）から九〇歳で亡くなるまでに、小布施に再三来村し、三年半滞在、岩松院本堂の天井画の大風呂図をはじめ、肉筆画三〇〇数点、祭り屋台二台に天井絵の傑作を残した。

モスクワ国立美術館での「北齋展」（一九六六）、日本橋高島屋の同展（六七）に町から貸し出した北齋画が国際的に評価を受けたことから、北齋の価値を知った当時の市村郁夫町長（高井鴻山の末裔）は「北齋館」（七六）を作った。まだ全国的に文化施設が少ない時代で、入館者は年間三万五〇〇〇人、九三年からは年間三五万人が訪れる町のシンボル施設となった。北齋館設立の目的は三つ。増加する新住民への対策として、新・旧住民の共通のシンボルを北齋に求め、町をひとつにまとめ



北齋館

上げようとしたこと。町内に散在する北齋の肉筆画を破損と散逸から守るためには収蔵庫が必要であること。町を特徴づける文化施設を持ち、誇りをもった町にしたいと考えたこと。時代の先を見据えた施策は成功し、「北齋」は小布施町のまちづくりの基礎となった。

#### 「小布施の栗菓子」

小布施栗の栽培の歴史は古く、室町時代（一三六七）に丹波の豪族荻野常倫が小布施に移住したときに持ち込んだといわれている。江戸時代には天領でもあり、品質の良さから献上栗となっていた。栗菓子の歴史は文化五年（一八



○八)、現在の三大栗菓子屋のひとつ、桜井甘精堂の初代桜井幾右衛門によって、「栗落雁」が作られたことに始まる。その後、小布施堂が明治十年(一八七七)、竹風堂が明治二六年(一八九三)に創業し、大正時代には栗の缶詰が通年商品として開発され、高級菓子として全国有名デパートに並ぶ。栗菓子屋は、全国に営業に行くことにより、都市の生活文化や最新の情報を直接手に入れ、地域ブランド形成と新たな業種転換へとつなげた。

七〇年代、竹風堂が志賀高原や野沢温泉からのスキー客や観光客を相手にレストランを開業し、製造業から小売業へと業種転換し、観光地としての町の歴史が始まった。八〇年代、小布施堂は景観を創造する栗菓子工場を作り、その空間を活かした現代アート展や文化イベントを開催し話題となった。竹風堂は「日本のあかり博物館」、桜井甘精堂は「小さな栗の木博物館」を作り、栗菓子屋がそれぞれ個性を発揮して、格調のある楽しい町のイメージを定着させた。現在、小布施町には、十七の博物館・美術館が存在している。

### 「町並み修景」

六〇年頃から、全国どこにでもある、

高度経済成長による貧しい近代化によって、個性豊かな小布施の町並みが姿を消していく。町ではこうしたことに危機感を覚え、これまでのすべてを壊し、町の歴史を断絶する再開発事業でもなく、古い町を復活させるだけの町並み保全でもなく新しい概念が必要と、「町並み修景」概念とその手法を誕生させる。住民や企業が、行政と同等の負担と責任を負うことで、凍結保存、移築、調和のとれた新築などによる一・六haの「悠然楼周辺町並み修景事業」(八二〜八七)を実施し、景観によって町の魅力を形成した。この生活環



小布施の町並み

境整備事業は、町の手入れと修理を連続させて行う手法で、十年の年月をかけた。

町並み修景手法は、生活者の生活の質的向上が最も求められ、二番目が地域アイデンティティ、産業振興(観光を含む)は三番目に位置づけられている。その特徴は、工場を町外に移転せず、住宅地と商店街を分離しない「群居の思想」で、コンパクトで多様な町の面白さを生み出した。住民生活の快適性と街道景観の創造を保障する「外はみんなのもの、内は自分のもの」の精神を町民全体に浸透させた。

行政では、町並みづくりのガイドライン「うるおいのあるまち環境デザイン協力基準」(八六)、表彰や助成制度がある「うるおいのある美しいまちづくり条例」を制定(九〇)、個性や特色を活かし快適で美しいまちづくりを進めるための「景観づくりの指針・住まいるための「景観づくりの指針・住まいるためのまちづくり」(九九)、「あかりづくりマニュアル」の策定(九二)、「あかりづくりマニュアル」(九七)と、法制化も進め、開発の際には「まちづくりデザイン委員会」で審査する仕組みもでき、永続的なまちづくりが保障された。一連の法制化は、行政が住民に対して課

するものではなく、小布施らしい「潤い」や「豊かさ」の表現を高めたいという、町民の「意志ある町」への願望の明文化であった。

### 「意志のある町」

各地域を見渡せば、日本の町は誰の町であるか、分からなくなってしまう。産業社会を重視するあまりに、個人住宅や商店建築の質の悪化や、美や文化への基準を持たない公共事業が進められ、先人たちが営々と築き上げてきた地域文化を壊すことに何の疑問も持たなくなってしまう。いつの間にか、没個性で観光客に迎合する町ができてきた。地域資源を活かすという名ばかりのキャッチフレーズの下、奥ゆかしい文化や佇まいが破壊され、どここのまちも豪華絢爛な観光地をめざした。

そうした風潮に、小布施は反旗を掲げたともいえる。まちづくりプロジェクトの一人、市村次夫小布施堂社長(高井鴻山の末裔で「樹一市村酒造場」の十七代目)は、こう語る。

「まちの主人公は町民。収入を得るために観光資源を開発する『目的観光』に対して、小布施町は暮らしの向上を

図った結果として成立した『結果観光』で、住民の暮らしがこころが、小布施観光の最大かつ唯一の資源。小布施人は観光産業においても、経済効果に劣らぬ重要性を『文化効果』におく。ふれあい出合いのすべて、すれ違う住民に心地よい緊張感を与えてくれる文化効果がある」。

「自分があるまち」「町の意志がある町」小布施の町民たちは、一連の事業を通じて、「自分の呼吸とまちの呼吸が合わさること」が豊かさだということを実感し、行政の金や権限を、自分たちが負担できない以上に要求しなくなった。こうした意志の手綱をしっかりと町民が握っていて、行政やデベロッパーによる巨大開発を拒絶した。

町並み修景事業は居心地のよい生活空間を住民が追求した結果、生まれたものだ。「北斎」のもつ文化やデザインをまちづくりに取り入れた斬新な発想、「栗菓子屋」によるイノベーション風の醸成、「町並み修景」事業が景観への町民意識の高揚を定着させ、小布施の流の楽しくしかも落ち着いた佇まいを創造してきた。しかし、地方の小さな町空間だけに、一定程度の整備等が進むとマンネリ化が始まる。小さな町で

のソフトの成長には限界があり、外から風が吹かないと活気は生まれない。

## 新たな主役の登場

町民自らが創造する伝統と米人まればとを大切にする風土から、新たなまちづくりの主役は登場する。町民が作り、町民が経営する、まちづくり会社「株式会社ア・ラ・小布施」の誕生(九五)、庭いじりが好きな町民の趣味をそのまま活かして、日本で始めて生まれた「小布施オープンガーデン」(二〇〇〇)、外からの風が吹く新しい出合いの場を創造しようとはじめた、地域文化サロン「小布施ツシヨン」の誕生である。

### 「株式会社ア・ラ・小布施」

まちづくり会社「株式会社ア・ラ・小布施」(九五)は第三セクターで、出資者は町民五六名、責任ある経営を目指して一人の出資金を五〇万円とし、行政は一〇〇万円とした。ア・ラ・小布施とは「小布施風に、小布施流に」の意味で、自分たちのまちを、自分たちの自由と責任をもって楽しみながら経営するために作った。利益配当は行わず、町の発展が出資の見返りという町民の心意気が清々しい。経営力と人望から現在の社長は市村良三小布施堂副社長が選



小布施オープンガーデン

ばれ、現場責任者は住民との接点が多い病院の院長秘書をしていた関悦子さんがスカウトされた。この会社の喫茶店は、住民がよく集まる場所のひとつとなった。

事業は、土蔵を改造した四室のプチホテル「ゲストハウス小布施」の経営、町から運営委託された「おぶせガイドセンター」(喫茶店を併設)、毎日曜に開催する「栗どっこ市」の運営、地元農林加工品のウッドプランターやオリジナル和風屋台の製造・販売、駅舎内のサロン喫茶(〇三)の経営など。さ

らに、毎夏の「小布施国際音楽祭」(二〇〇〇)、秋の「北信濃小布施映画祭」(〇三)の開催など、町民が飛び回って楽しんでいる地域経営組織と成長し、新たな時代における、地域文化のパトロンの一人となった。

### 「小布施オープンガーデン」

この町は、もともと庭いじりが好きな町民が多く、「庭作りが好きじゃないと嫁になれない」と冗談交じりに話すほど、小布施オープンガーデンでは、生活の楽しみ・人付き合いとしてごく自然に庭作りが営まれ、狭い路地裏・軒先・玄関に、盆栽や鉢植えを数多く見ることが出来る。ふるさと創生一億円事業で、主婦等一〇〇人以上が欧州視察に行った効果もあり、約六〇軒の個人庭園が参加している。ガイドブックを片手に歩いてみると、木製の小看板がかかっている庭では、町民や訪問者同士が相互に交流する風景が見られ、町中いたるところに木々と草花が生活の中に根付き、観光地とは一味違う趣味のよい暮らしが魅力的である。

### 「小布施ツシヨン」

「小布施ツシヨン」は、〇一年八月八日からスタートした地域の文化サロンで、セーラ・マリ・カミングスさん

(米・ペンシルベニア州生まれ、榎一市村酒造場・小布施堂取締役)がプロデューサーをしている。毎月一回ゾロ目の日、小布施堂工場内にある小さなレクチャールームは、町民と全国各地からの人でいっぱいになる。

セーラさんは、『まちは人』、地方では楽しみが少ないので、普段から出会のチャンスを与えてあげたいと考え、若い人が刺激を受ける場を作った。ゾロ目の日に開催しているのは、季節を大事にしたいという思いから。その場のその空気を共有することが大事



小布施堂工場の3階にあるレクチャールームで行われる小布施セッション

で、その場から交流や活動などが拡がって欲しい」と語る。「人は遊んでいる時に育つ」とは文学者小林秀雄の言葉だが、小布施セッションに参加してみると、実感できる。「仕事をするだけが人生じゃない。遊びの中に未来のヒントがある。発想の面白さは過激になること、だから道楽」と市村次夫さんは言うが、そう簡単なことじゃない。

市村さんは、「二十一世紀の企業には利益に代わる最終目的が生まれてくる。それは『企業には企業の自己実現が必要だ』ということ。『あそこがある』と町が明るくなるね』『楽しいね』と、みなさんに感じていただきたいという、実に単純な価値観に行き着いたから。小布施の歴史も弊社の歴史も、サロンの主宰と展開が主題。つまりサロン文化こそが私たちの目的であり、手段であり、活動の根幹でさえあった。『小布施セッション』はイベントというより、お家芸であるサロン活動の新たな姿だ」という。

小布施のまちづくりはひとつの踊り場であり、新たな段階にむけたイノベーションの胎動期にあるといってもよく、小布施セッションが果たす役割には大きなものがある。セーラさんが「外



榎一市村酒造場の和風レストラン「蔵部」(くらぶ)の外観

からみた日本文化や小布施の視点」で投げかけてくる論点は、新鮮で刺激的である。

時の流れが違う小布施町境界。ちょっと辺鄙だけど田舎過ぎない、静かだけれど住んでいる人の気配がする、知らない場所なのにどこか懐かしい空間を感じて心地よい。親戚がいるわけでもないのに、また立ち寄りたくなるような小布施。小布施セッションは、小布施町や小布施堂という資源を上手く生かした、小布施でしかできない新しい知的なコンベンションモデルであり、

展開スタイルも小布施文化となりつつある。

## まとめ

住民白らが「意志のある町」を実現する時代。それには、芸に励むがごとく自らを高めるために、自己を発見するための「勉強」が必要である。その結果、地域のもつポテンシャルが美文化の基準として、町並みなど景観に表れて、未来を見据えたまちづくりとなる。「町の意志のある町」での「意志のあるセッション」は、国家ではなく、一人ひとりが「意志を持った町」をどのようにして実現するのかというテーマを我われに突きつけている。

賑わいより静かな佇まい。まちは情感の深い、陰影がある、根の深さを持ち続けるものであって欲しいと願っている。住民がどんな時間を過ごしたか、年を経るごとにどんな記憶が生み出されたか、それが未来を見据えたまちの想像力につながる。時間をかけて住民たちが地域の歴史と文化を見直していくことで、新たな発見があり、それが誇りや自信につながっていく。小布施の試みは、まちづくりにおいて、さまざまな示唆を与えてくれる。

# 人ありてまちあり

## 住民が主役のまちづくり



### 愛媛県・内子町

町並・地域振興課長 大野 千代美 氏に聞く

#### 歴史的建造物に泊まる！

「止談風月無用者可入」。厳かな門構えの玄関には、ただ風月を談じるなら、用事がなくても屋敷に入りなさいと墨書してある。庄屋の流れをくむ「高橋邸」が内子町に寄贈されたのは平成五年のこと。町は、あくまで地域の住民主体での活用を促した。参加したグループの女性たちは、掃除から企画事業まで手がけ、平成十四年七月から宿

泊をオープン。一日に、一人から十人くらいまで一組しか泊めない。

泊まってみて驚いた。二階建ての歴史的建造物に一人で泊まる贅沢もさることながら、時代を一気にタイムスリップして時の刻みがゆるむ。

「住民の女性グループが自分たちでゆつくりと、一つずつ納得しながらスローでやってきたことに意義があると思っと思っています」と仰るのは、内子町町

並・地域振興課長、大野千代美さん。

「内子町は、文化や歴史に光をあてながら滞在型の、特に小グループの皆さんにゆつくりとすごしていただく観光のあり方をめざしています。高橋邸がきっかけになって、まちの若い人が町家民宿を始めたいということで改修が始まりました。」

行政がすべてを引っ張るのではなく、適度な提案で住民に移行するやり方は、二十余年にわたって内子町が培ってきた町並み保存と再生運動の基本姿勢でもあるのだろう。

#### スローなまちづくり

内子町が町並み保存運動に取り組んだのは、日本国民の九割が中流意識を持つて開発と消費に目を向けていた昭和五〇年代初頭のこと。自分たち固有の暮らしや歴史的資産にこそ価値があると標榜した。以来、一万二〇〇〇人ほどの小さな町の住民主導型まちづくりは全国のまちづくり関係者に注目さ



大野 千代美 氏

れてきた。観光客も年間五〇万人を超えるようになった。内子座や八日市護国の町並みなど、内子独自の地域資産活用も根を下ろした。しかし、ここからどう展開していくかが端から見ると難しくも面白いところである。

「確かに、多くの人が

来てくれることは町民の誇りや喜びになります。けれども、町並保存地区は居住空間をしっかりと守りながら、まちの良さを理解してもらおうことです。訪れた方が一時間で通り越していただくよりは、一人でも多くの人が内子に滞在して町の人たちと交流してもらおうか、内子に新しい文化や考え方などの提案をいただけるような質の高い方に訪れていただけると思っています。進めていくかが重要だと思っています」と大野さん。そうした意味もあって、グリーンツーリズム研究会も立ち上がるらしい。

内子というまちは、のんびりしているけれども何かやっつるな、何かが違うと思わせる興味がある。スローライフという言葉が昨今もてはやされてい

特集

こんなまちに住みたい

～人がまちをつくり、まちが人をつくる～





八目市・護国地区の町並み  
(国選定重要伝統的建造物群保存地区)

るが、人々が先の世紀に置いてきてしまったスローな価値なら、このまちは先刻気づいて磨いてきた自負もあるう。一時的な集客に走らず、自分たちの町並みと暮らしぶりを資産として育ててきた節度もある。しかし、このまちの揺るぎないスローライフを支えてきた根っこにあるのは、行政と住民が保ってきた地域資産に対する民度の高さだという気がする。

大野さんの前任者・岡田文淑氏を「町並み保存」から「村並み保存」へ



石畳地区の水車

と駆り立てたのは、壊れていく山村への危機感だったという。山村の美しい風景は、放っておけば壊れるのは自明の理である。それでも手をこまねくしかない事例はあまりに多い。内子町も過疎と高齢化を内包する典型的な中山間地である。村並み保存と再生に、町並み保存で培った経験とノウハウを生かせないか。住民とじっくり手探りで話し合うしかない。思いはやがて、景観と環境整備というこれまたスローな価値に方向性を見いだすことになる。

### 新しい内子の物語を

山あいの石畳地区で三基の水車が復

元されている。十三年前、農家の長男十二人で組織された「石畳を思う会」によるものだ。その近くには、農家の主婦が運営する宿泊施設「石畳の宿」がある。地域の食材と手づくりのもてなしで年間二千人の利用客のほとんどが口コミだという。囲炉裏のある板間で寛ぐのもスローライフの真骨頂か。

内子町の屋根つき橋は、今や知る人多い貴重な現役の土木遺産である。その一つ、麓川に架かる田丸橋は、かつてトタン屋根だったものを、地域住民により杉皮葺きに改修され、保存会によって管理されている。歴史遺産に対する民度も高い証左である。だが、次々と出てくる課題は時代の必然か。大野課長の正念場は果てしがらない。「住民の方の知恵や行動力、持続性には本当に驚かされます。やはり、住民の方が主役になっているところが強いですね。」

過疎化、高齢化という現象、町村合併の問題など現実的ですが、住民の人たちがさまざまなまちづくり、地域づくりのフィールドの中でいかにコミュニティを再生していくかが鍵です。自分たちの、目的意識を持った地域づくりをしないと、特に山間地域は忘れら

れる可能性もあります。既存のコミュニティ組織とも連携して助け合う活動も必要です。

平成十四年から自治会制度を立ち上げて活動しています。十八の自治会で一〇年間を期間に地域づくり計画をたてて展開していますが、そこには三人の行政職員が参加しています。その人たちが黒子になって地域づくりをバックアップしていくことも大きな力になると思います。

組織を立ち上げ、形はできても、住民ができることと、行政が後押しできることのバランスがより大きな力を生むということか。内子町が醸し出す魅力的な村並みや町並み、パブリック空間は、そこを訪れる人の民度を映す尺度でもありそうだ。

「まちづくりに繋がる活動は地道です。そこにぼこつと光をあてたり、評価するシステムをつくっていくことも大きなエネルギーになるでしょう。」

いい景観も大事ですが、そこに住んでいる人が大きい。そこに外から人が来る。人と人との交流が文化を深める。やはり『人ありてまちあり』だと思えます」。大野課長の挑戦は続く。

(構成・緒方英樹)



# このまちに暮らす10年後の人々へ

## 本吉町公民館写真教室が綴るメッセージ

このまち  
に暮らす  
10年後の  
人々へ。

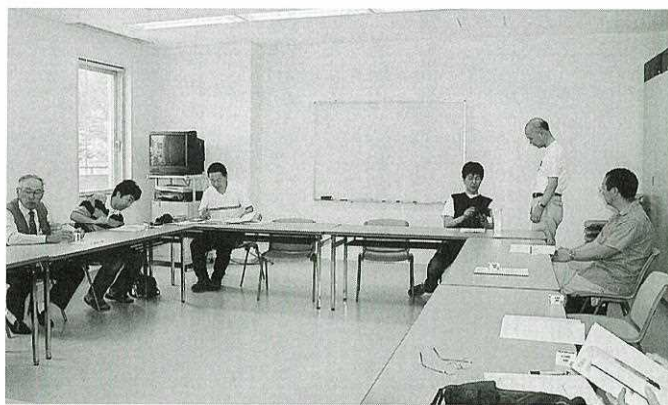
本吉町は、宮城県の北東沿岸部に位置し、町の三方を山々に囲まれ、太平洋側は雄大な太平洋を臨むリアス式海岸を形成し、南三陸金華山国定公園に指定されるなど、豊かな自然に恵まれている。

人口は約一万二六〇〇人（平成七年現在）、町の総面積の約七〇％を山林が占めており、主な産業は農業、漁業・養殖業、林業、製造業、サービス業と広範に及んでいる。

町内には三つの公民館があり、その一つ、本吉町公民館には一風変わった写真教室がある。ここでは、写真撮影の技術は教えない。この町で、意識・無意識に何を見ているか、何を見ているか、何を問う確認する作業を、写真を通して行っているのだ。だが、まちづくり活動の一環というわけではないという。

### モノクロームの町から見えるもの

平成七年度から始まった写真教室は、とりあえず一〇年間続けることを目標に活動を続け、今年度で九年目を迎えた。参加者は小学生から六〇歳代までの二六名で、ほとんどが継続組である。



今年度は6月15日に開講式が開かれた（右から3人目が小岩氏）

なかには親子や夫婦で参加している人もいる。

写真教室は毎月一回平日の夜に開かれ、写真の引き伸ばし作業や毎年発行している写真集「このまちに暮らす一〇年後の人々へ」の制作を行っている。写真はすべてモノクロ撮影で行われ、川内地区の元分校で開催する文化イベント「川内山学校」や公民館活動の発表会「公民館まつり」などで展示している。

この講座の講師である写真家・小岩勉氏（仙台市在住）は、「川内山学校」

への参加がきっかけとなり、写真教室の講師を引き受けることになった。

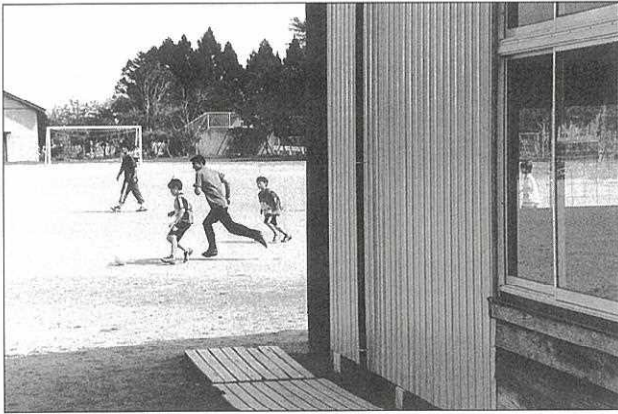
「どうせやるなら一般的なイメージに当てはまらない講座にしたかったので、撮影対象を町内の日常生活や風景に限定しました。」

モノクロ写真にこだわるのは、色の情報がないので見る側も想像力を働かせて感情移入しやすく、写っている人物や風景の生々しさが減って匿名性が出るという理由もあります。

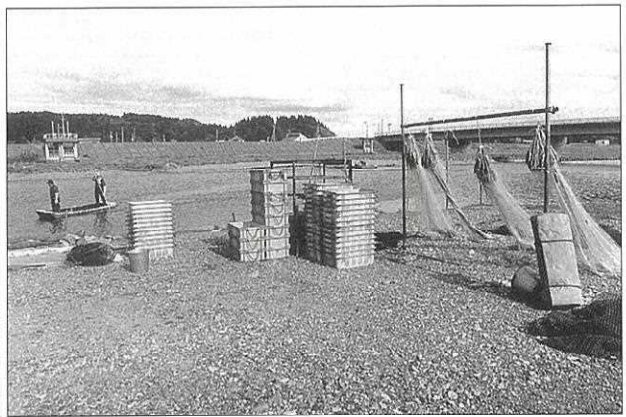
写真集は、最初は作る予定ではなかったんですが、展示が終わったらそれっきりになってしまうのももったいないですね。幸い、印刷工場に勤めている受講生が二人もいたので、自分たちが支払える程度の額なら作ろうということになりました。公民館だけでなく宮城県美術館のブックショップにも置いてもらっていますが、毎年出るのを待つて買ってくれる人もいますよ。」

昨年四月から写真教室を担当している公民館職員の三浦孝一氏は、自身もカメラを手にするが、受講生をこう評価する。

「受講生は積極的で、引き伸ばしも自分たちで率先してやっています。お互いに刺激を受けて色々と工夫してい



島山 幸治 2002年9月 本吉町平貝



阿部 勝造 2002年11月 本吉町泉

るみたいですよ。日常の一コマを撮るといふコンセプトも、すっかり浸透しているようです」

ここ数年は、写真集に掲載する写真の選定や構成についても受講生自ら手がけているようだ。受講生の一人は、「八年もやっているのに、まだ講師の手を借りなければならぬときがあつて悔しい。いずれは自分たちだけで完成させたい」と意欲を見せていた。

### 時代の空気を追いかけて

写真展では、一人ずつ大きな額に何枚も写真を並べて展示し、イメージを限定しないようタイトルは付けず、トリミングもしていない写真を使う。そうすることによって、何気ない写真の集合体から、撮影者の生活空間が浮かび上がってくるのだそうだ。

「なぜ特別ではない写真を撮るのか」と言えば、住む場所や環境は違つても、「暮らす」ことに關しては東京も他の地域も共通するものがあるからです。最近、東京の昔の街や人が写つた写真集が何冊も出ていますが、東京の人だけでなく全国の人が買つている。それは、場所は違つても、「時代の空気」が同じだからです。本吉町でもお祭り



川内山学校での展示風景

など土地独特のものではなく、全国に共通する普遍的なものを撮りたいのです」と小岩氏は話す。

### 発見された四〇年前の記憶

昨年の「公民館まつり」では、四〇年前の町並みと現在を対比させた写真展「このまちに暮らした四〇年前の人々から」が開かれた。

四〇年前の写真は、当時の公民館職員が商店街などを丹念に写したもので、昨年公民館の古いアルバムの中から発見された。現代版の写真は、受講生の一人である島山武志氏が担当し、四〇年前と同じ場所を同じアングルで撮影した。並べられた写真を見比べて、未舗装だった道路や商店の看板、通行人

の服装などが懐かしいと、来場者に大好評だった。

四〇年前といえば、東京オリンピックの開催や新幹線が開通した時期で、その頃から、町の風景は変貌を始めたという。失われていくものを記録しようとして、当時の職員はシャッターを切っていたのかもしれない。

### 一〇年の節目に向かって

奇しくもこの講座が一〇年目を迎える平成十七年三月に、本吉町は近隣の気仙沼市・唐桑町との合併が協議されている。町の名前が変わつても、生活は今まで通り続いていくのだろうか、この活動を通して記録された何気ない風景の集まりが、何年後に意味を持つてくることを、受講生は感じ取っているようだ。

だが、彼らから気負いのようなものは少しも感じなかった。ただ伝わってきたのは写真が好きだという純粋な気持ちと、本吉町での生活への愛着であった。一〇年目を迎えた暁には、活動の集大成として写真展を開く予定とのこと。ぜひ写真を通して受講生の感じた本吉町を体験してみたい。

(構成・小野久美子)

吉田 桂一「よしだ けいじ」

連合設計市谷建築事務所代表取締役。

工学博士。一級建築士。

住宅・文化施設等の設計を幅広く手がけ、公共建築賞など多数受賞。

『民家に学ぶ家づくり』等の著書も多い。

# 日本の家は退化してきているのではないか

人間が造る物は、新しい物ほど従前の物より良くなると思っ  
たのは、大変な間違いだったと思わざるをえない。こと住宅に関し  
てである。

住宅の機械生産化が進んで、良質な住宅がより安価に造られるよ  
うになったといえるであろうか。否である。悪質な住宅が大量に造  
られているといった方が当たっている。これを五つの大罪として示し  
ておく。

- 1 木の隠蔽化
- 2 建材の不良化
- 3 家の閉鎖化
- 4 間取りの小部屋化
- 5 家の短命化

1は木造ながら木の見えない家になっていること。2はシックハ  
ウス問題などで明らかだ。3は閉めっきりの空調生活。4は子供が  
部屋に籠って社会性が育たないこと。ふれあいの乏しい家族生活。  
5は使い捨ての家。どれも説明すれば長くなるので、考えていただ  
くことにして、ここでは3の問題を取り上げてみたい。

これは住宅の性能評価が法的に認定されるようになったことも関

連する。高気密・高断熱住宅にして住宅の性能を高めることだから、  
省エネルギーで環境保全に結ぶと考えられているけれども、多少大  
袈裟な表現でいわせてもらおうなら、人類の生存に関わるほどの問題  
に繋がっているのではあるまいか。

高気密・高断熱にすれば、暖房・冷房時の省エネルギーに寄与す  
ることは確かだが、密閉された室内では酸欠状態になるから、二四  
時間の機械換気が義務付けされる。台所の熱源も電熱になる。

日本の気候は暖房も冷房も必要ない時期や時間が相当あるのだから、  
そんな時には機械に頼らず、窓を開けて暮らせば二四時間空調  
生活にはならないのだが、果たしてそんな暮らしをするであろうか。  
それが疑問だ。

日本のかつての家は極めて開放的な家であった。内と外も、内と  
内も、どこも一体的な空間に繋がりがあう家であった。開放してあ  
れば、燕が家の中を飛び抜けてゆくことさえあった。通風抜群、家  
族のふれあい抜群の家であった。

夏の暑さは通風の良さで凌げても、冬の寒さは耐え難かった。着  
ぶかれて、コタツと火鉢だけに頼って寒さを凌いだ。

冬、暖かく過ごせる家が欲しかった。暖房を効率よくするために



は、家の気密性と断熱性を高めなければならない。家は閉鎖性を少しずつ高めていったが、まだ開放性はそれほど失われてはいなかった。

冬の暖かさを獲得すると、夏の涼しさが欲しくなる。事務所も車も電車も二四時間空調になって、それが家にも及んできた。高気密・高断熱住宅への傾斜が始まり、家の閉鎖化が急激に進行する。どこも開放的だった家が、小さな窓がポコポコ付く家になってしまった。二四時間空調できる設備があっても、機械を止めて、窓を開けて



吉田桂二氏設計による内外ともに広がりのある家の例  
(東京・田園調布のYさんの家)

暮らせばよいではないかということではあるが、家の中を無菌状態にしておくのが、健康的な暮らしだと思っている人が多いのが心配だ。こんな人はゴキブリがいるだけで大騒ぎするが、ゴキブリも生態系の中の存在なのである。窓を開けず密閉した二四時間空調生活が、果たして健康的でありうるかを問題にしなければならぬ。

日本の家の開口部の造りは、幾種類もの建具を重ね使いして、外部の状態に応じて内部空間を適応させてきたが、閉鎖性が高まるにつれて、開口部の造りが単調化し、ペアガラスを入れた建具一枚になってしまっている。

これというのも、家が単なる密閉された箱でよいことになったからである。家が退化したのではないかと思いたくなるではないか。

二四時間空調生活は寒さ知らず、暑さ知らずだから快適だ。窓を開けなければ花粉もホコリも入ってこない。楽な暮らしを一度味わってしまえば、それを続けるのが習慣化する。

こんな暮らしをしていれば、環境に対する適応力が徐々に減殺されてくるだろう。つまり培養器の中だけで生かされている生物と同じになることだ。

人類の生存に関わるほどの問題に繋がると当初に述べたのは、このことである。昔は花粉症などなかった。子供は杉林の中で花粉まみれになって遊んでいたのに、なぜなのか。杉の木は「俺のせいじゃないぞ。変わったのは人間の方だ」というだろう。花粉症は人間の環境に対する適応性が減殺されたためではないのか。花粉症は密閉生活の害を警告する赤信号のような気がする。

花粉症をきっかけにして、人間の環境適応性が弱体化すればこれから先、次々と人間の側から引き起こされてくる病気が相次ぐのではないか。密閉化した家への変化は、家の退化程度のことではなくなる。家の退化は人間の退化を示すバロメーターであるのかもしれない。

降も重要です。撮影現場に出て、スタッフや役者さんたちとコミュニケーションをとりながら作業を進めていきますので、そうしたコミュニケーションが苦手な人は辞めていくケースも出てきます。

## リアルさとは別のもの

いろいろな監督と仕事をされていますが、それぞれやり方が違う場面もありますか。

基本的に僕が専門でやっているのは、特殊メイクであつたり、それに付随する造形であつたりしますが、最終的にできあがるものは一本の映画です。ですから、特殊メイクや生首といったものは、できあがる映画を構成するために必要な部品であり、その映画の中で効果的な役割を果たしたいと思つています。ですから、いろんな監督と組むときに、その監督の好みやテイストを前もって考えることはしません。その作品のいちばん有効な効果をどう出しているかが一番のポイントだと思つています。

一人の老婆のメイクを例にとると、ただリアルな老婆であればいいということではなくて、とても様式的な老婆でなければいけない作品もあるし、逆にリアルに見えてはいけない場合もあります。それもマニュアルで決められるものではないので、監督によつてその要求も作業も変わってくるのは至極当たり前のことと言えるでしょうね。

僕は特殊メイクに要求されることはリアルさではないと思つています。映画の中の現実には、リアルとは別ものだと思います。だからメイクがあるのです。

法医学や解剖学をひもとくこともあるとか。

そういう資料は調べますが、調べて、その通りにつくるわけではありません。映画によっては、非常に凄惨なイメージにしたいという場合、より生々しくつくる必要があるのですが、その傷の状態を法医学で調べると、案外つくりものというか、漫画じみていたりすることがあるんです。その逆のパターンもあります。ですから、本物はこうんだけど、少しつくりもののテイストにしたり、その辺のさじ加減は特に神経質になりますね。メイクがいくらよくできていても、映画の求めているものと合っているかどうか、的確にとらえているかどうか、そのアンスンブルが大事です。

特殊メイクは、それだけで成立、完結する作業ではありません。メイクをした俳優さんの演技であつたり、ライティングや撮り方であつたり、ストーリーや演出、編集などのすべてが相まってそれに見えるということなんです。

## 日本の風土と妖怪映画

そして初の劇場映画監督作品は『さくや妖怪伝』。時代劇で妖怪映画をやりたい思いがずつとあつたとか。

それは個人的な夢だったんですが、小学一年生の頃、初めて観た実写の妖怪映画が『妖怪百物語』でその影響が大きいですね。そのあと大映の『妖怪大戦争』や『東海道お化け道中』を観てすっかり夢中になってしまった。そんな楽しい気持ちをいまの子

供たちにも味わってほしいという気持ちがあつたんです。それで、八六年に手塚真さんと『妖怪天国』（オリジナル・ビデオ）を、九〇年にはその第二弾もつくつたりしましたが、それでも飽きたらずに妖怪映画の復活を期していたというか。いまだき、日本のお化けというのも古いかもしれませんが。

いまは妖怪やお化けを子供が受け入れる土壌が希薄な時代なのかもしれませんね。

よほどの田舎に行かないかぎり、真つ暗な夜の闇があるわけでもない。風にゆれる竹林のささやきに怯えたり、宵闇の水たまりが妖怪に見えたりといった体験や感性を育む風土やゆとりが失われているのかもしれない。大人も、子供だましくくだらないことみたいな認識があつて、子供もその影響を受けているのかもしれないね。

『さくや妖怪伝』をつくつて一番うれしかったのは、映画を観たお客さんが映画会社感想文や手紙を送ってくれて、それが回送されてきたんです。夏休みに映画館で観た子供たち、特に幼児層が描いて送ってくれた絵が、から傘小僧とか、お化けの場面なんです。今の子供と昔の子供では違うのでしょうか、やっぱり子供は、から傘お化けが踊つたりするようなところが結構気に入つてくれているというのが、個人的にはうれしかった。子供が好きで、楽しい事柄はあまり変わらないのかもしれませんがね。

これは映画の話ではないんですが、神宮や隅田川で花火大会を見に行くと、親に連れられた子供たちが結構浴衣を着ていますよね。それで何だか楽しそ

うにしている感じを見ると、子供たちに日本的な生活風土は薄れているのかもしれないけど、実はそうしたことが求められているのかもしれないと思うときがあります。

例えば、京都の地藏盆のお祭りなんかに行くと、たくさんのお親子連れが何か素朴に日本のそういう習慣を楽しんでいる様子がうかがえます。それから、オフィスビル街のビルのすき間に小さな祠が祀られていたり、お稲荷さんがあつたりとかというのは、何かしら日本人には根づいています。日本の映画は、そういうところをもう少し大事にしたほうが良いと思うんです。

ハリウッド版『ゴジラ』の台頭、進化し続ける『猿の惑星』などに対してどんな感想をお持ちですか。

そこはつくり手としての認識をきちんとして映画をつくる必要があると思います。例えば、日本にもハリウッドに負けない技術があるんだということ、最近CG（コンピュータ・グラフィック）をたくさん使っていますね。確かに技術もすぐれているし、すごい仕事だと僕は思っています。

しかし、一つ肝心なのは、最近日本映画にあるCGって、ハリウッドでつくった『ハリーポッター』や『マトリックス』なんかとアイデアが同じなんです。技術は追いついてもアイデアや表現方法までコピーしてしまつては、日本のホラー映画が海外のコピーにすぎないと言われたことと変わらなくなつてしまいます。



『跋扈妖怪伝 牙吉』より

それと、ハリウッドのゴジラはあれはあれで映画表現としてすばらしいと思います。ただ、日本人が知っているゴジラとか怪獣は、人がぬいぐるみを着て映っているわけで、どこか少し人間的なんです。日本の場合、歌舞伎の『児雷也』で出てきた大ガマも人がぬいぐるみを着ていたんです。そうした延長にある怪獣やゴジラを見てきた国民性というのもあるって、CGで精巧にできて俊敏に動くゴジラには何となくしっくりこない面もあるのかもしれないですね。

監督第二作目は、『跋扈妖怪伝 牙吉』。今年の十月公開予定です。

またまた時代劇です。『さくや妖怪伝』以上に、時代劇的要素は強いと思います。牙吉というのは原

田龍二の演じる渡世人の名前なんです。この主人公自体がいわゆる狼男の種族で、妖怪が人間に追われて行き場がなくなっているみたいな世界観で渡世人をやっているという設定です。いま撮影と編集が終わったところで、これからダビングして完成です。松竹の京都映画という『さくや』を撮った撮影所で撮ったんですが、きちんとした時代劇のおいを出すには一番ふさわしい場所だと思っています。いま、ある意味で映画のファクトリーとしての撮影所はなくなっている中で、唯一、そうした雰囲気が残っています。かつて『必殺シリーズ』をやっていたところで、いま『剣客商売』というシリーズで唯一時代劇を持っている撮影所です。

演出は前にも？

『さくや』の前にVシネマ（『ミカドロイド』）で一本特撮ものを撮ったことがありますので、今回実は三本目ということになります。特殊メイクをやるのとはまたずいぶん違うのですが、作りたいたいのイメージは自分の中にあるのと、俳優さんにも恵まれ、撮影所のスタッフがよく支えてくれました。

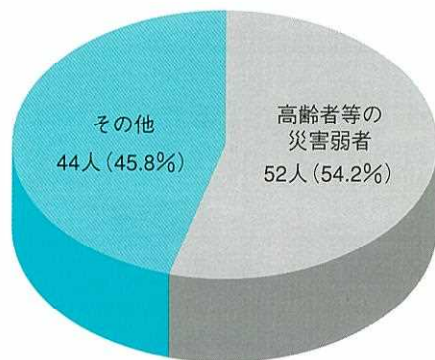
封切りを楽しみにしています。

では、次の方をご紹介ください。

『跋扈妖怪伝 牙吉』で衣装をデザインしてつくってもらった川上登さんというアーティストがいます。ジャップ工房という服飾とジュエリーをやっている老舗を主宰している方で、聖飢魔IIというバンドの衣装なんかもつくっています。

## 高年齢等の災害弱者への対策

土砂災害による死者・行方不明者に占める  
災害弱者の割合（平成9～13年）



資料：国土交通省

図表を見ると、平成九年から十三年までの土砂災害による死者・行方不明者の累計に占める高年齢等災害弱者の割合は、五四・二%と過半数を超えている。このように、種々の災害が生じた時、災害弱者は、自力での避難が不可能、あるいは避難に時間がかかることが多い。また、少子高齢化に伴う病院・老人ホームといった災害弱者関連施設が増加していることも、災害被害者における災害弱者の割合が高くなっている背景の一つといえる。このような災害弱者を災害などから守るため、以下のように、ハード面及びソ

フト面の両面から様々な対策に取り組んでいる。

1. 老人福祉施設等の周辺における砂防関係事業等の重点的実施等のハード的対策

土砂災害等の犠牲となりやすい自力避難が困難な災害弱者に関連した災害弱者関連施設に係る危険箇所について、採択基準の拡充等により、砂防えん堤等の土砂災害防止施設や人工リーフ等の海岸保全施設を重点的に整備しており、平成十四年度においては、約七六〇箇所を実施している。

2. 災害情報の提供や土砂災害特別警戒区域等内の開発行為の制限等のソフト的対策

災害弱者関連施設の管理者等に、土砂災害の危険性に関する情報の提供を行い、災害への注意を常に喚起している。平成十四年六月には、約四七〇〇施設等に対して、訪問等による土砂災害情報の提供を実施している。

また、「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律」に基づいて、土砂災害特別警戒区域等内の災害弱者関連施設等の建築のための開発行為の制限等を推進している。

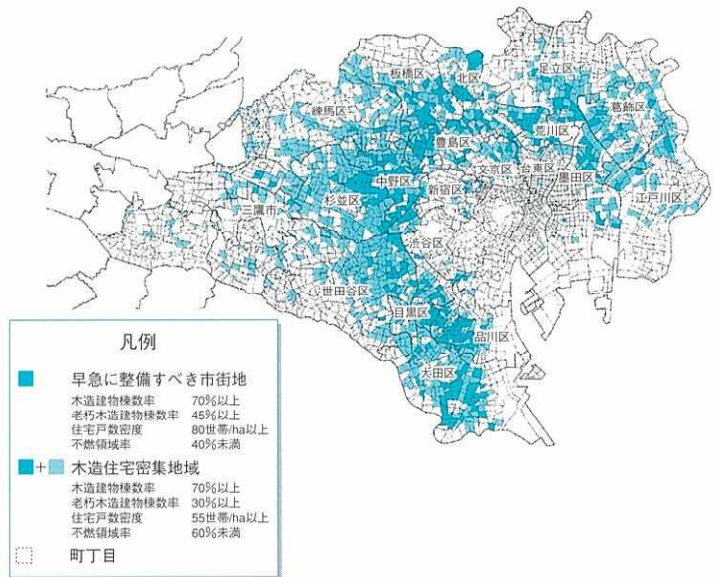
3. 高齢者の給水作業による負担の解消

災害対策のみならず、特定状況による高齢者等災害弱者の負担の解消も図られている。山間地域や離島等においては、水道普及率が極めて低く、不安定な水源に依存しているところが多い。そのため毎年のように給水制限・断水があり、その都度、給水車等が出動して給水作業が行われている。そのような地域では高齢化率も高く、給水運搬作業は多くの高齢者の負担となっている。そうした高齢者への大きな負担を解消するために、安定した新たな水源となる生活貯水池の整備を推進している。

## 密集市街地改善の取組みについて

木造のアパートや一戸建て住宅などが密集している市街地（＝木造密集市街地）には、戦前からの既成市街地も多く、道路や公園等公共施設の整備が遅れている傾向がある。また、市街地は建て詰まり状態にあり、災害発生時に緊急自動車の進入が困難であるところも多いほか、戸数密度や木造建築面積の割合が高いため、火災発生時には延焼が拡大する危険性があるなど、災害に対して脆弱な構造となっている。さらに、既成木造市街地では、老朽化の問題も抱えており、住宅の広さ

木造密集市街地の分布状況（東京都）



資料：平成9年木造密集地域整備プログラム（東京都）

や設備などの水準が低いうえ、日照・通風などの住環境の課題も併せ持っている。一方、図表をみると、木造住宅密集地域に指定されている地域は都心に近接している場合が多いことが分かる。このような地域には、交通利便性が高い、多様な業種が集積し文化・教育・購買・コミュニティ施設が整っているなど、定住市街地としての魅力もあり、早急な整備が期待されている。

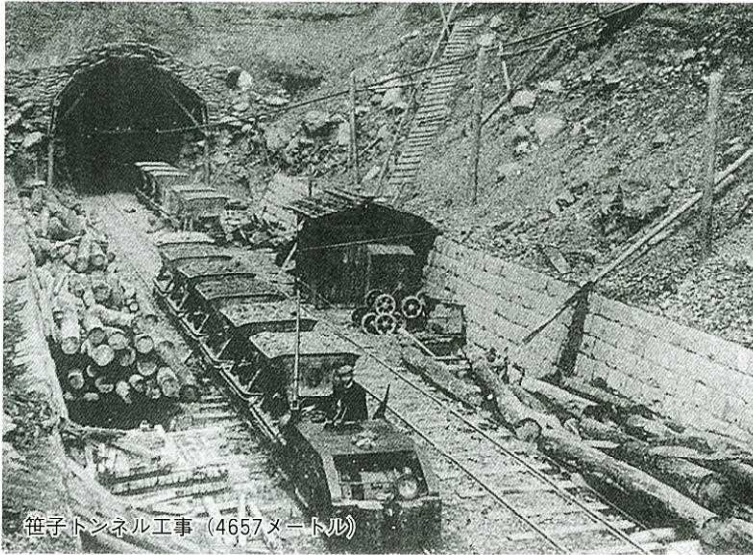
このような状況の中、政府の近年の取組みとしては、平成十三年十二月に、都

市再生本部において「密集市街地の緊急整備」を都市再生プロジェクト第三次決定として位置付けた。この中で、特に大火の可能性が高い危険な密集市街地を対象に重点整備し、今後一〇年間で最低限の安全性を確保することとし、未整備都市計画道路と沿道市街地等の整備を行うことによるオープンスペース機能を持つ骨格軸の形成、専門家・まちづくり組織の活用、民間活力を発揮できる制度の導入等の方針が示されている。

また、平成十四年二月に社会資本整備審議会都市計画分科会が行った中間とりまとめにおいても、住民主体の防犯まちづくりの推進、公共による重点整備と民間活力活用による防犯性向上の促進等、今後の密集市街地の改善の基本的方向が示されている。

国土交通省では、「密集市街地における災害街区の整備の促進に関する法律」等に基づく都市の面的整備や段階的整備による木造密集市街地の解消に努めるとともに、災害時の延焼拡大防止、避難・消防・救護活動等に寄与する道路、公園等の根幹的な公共施設や沿道市街地を緊急に整備し、災害に強い都市構造の形成を図っている。

# 中央線の建設工事



笹子トンネル工事 (4657メートル)

## 土木史余話 7

交通史研究家

沢 和哉

### 国防上の重要路線として

創業当初、鉄道敷設に反対していた軍部は、一八七七年(明治一〇)の西南戦争で大阪と神戸間の軍事輸送を体験し、強く鉄道の効用を認識した。そして、のちには「鉄道は兵器なり」のスローガンを掲げ、鉄道隊まで組織するようになった。

一八七九年八月、アメリカ合衆国の前大統領グラント(Ulysses Simpson Grant)が、世界周遊の帰途、日本に立ち寄った。その歓迎会の席上、わが国の政府関係者が、グラントに「日本の将来の鉄道建設について」の意見を求めた。

グラントは「島国の日本では、とりあえず中央に一本鉄道を敷設すれば、あとは水運で間に合うでしょう」との見解を示した。

その後、すでに幹線の建設の項で述



中央線ルートの比較調査を行った技師・原口 要

べたように、幹線のルートは海上から攻撃されやすい東海道を避けるようにとの軍部の要求があり、一八八三年中山道經由幹線の敷設が決定。しかし工事が予想外に困難だったため、一八八六年東海道ルートに変更となった。

一八九一年(明治二四)には、鉄道国有論者の鉄道庁長官・井上勝が、鉄道国有論の建議書、いわゆる「鉄道政略ニ関スル議」を内務大臣あてに提出。この建議書が母体となって、翌年八月、わが国に国有鉄道を敷設するための法律「鉄道敷設法」が公布された。

その中で中央線は、ルートを「神奈川県下八王子若ハ静岡県下甲府及長野県下諏訪ヲ経テ、伊那郡若ハ西筑摩郡ヨリ、愛知県下名古屋ニ至ル鉄道」として、早期に敷設する第一期線に加えられた。

こうして、一八九二年八月から翌年三月にかけて、技師・原口要によるルートの比較調査が行われ、中央線は甲武鉄道(一九〇六年政府買収)の終点八王子から、甲府、諏訪を経て、西筑摩郡より名古屋まで、三六二・一キロの敷設が決定した。

しかし、山岳地帯を貫通する中央線は、測量、工事ともに容易ではなかつ



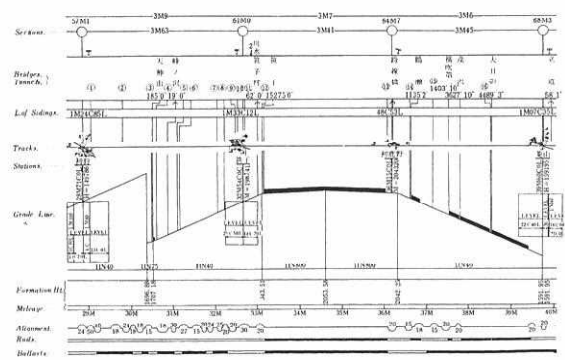
中央西線初代出張所所長  
大屋権平



中央東線初代出張所所長  
古川阪次郎

た。のち工事を管理した古川阪次郎も、後年「測量といっても、平地と違って海拔三千八百尺（二一五メートル）に達する山々の山腹を貫くトンネルのことだから、八間（二四・五メートル）もある梯子を使って断崖を登ったり、猿のやうにマニラ縄にブラ下がったり、人夫などは随分危い離れ業をやったものだった」と回顧している。

工事は、宮ノ越（長野県下）を境として東西に分け、一八九六年四月この工事を管理するため、八王子と名古屋に出張所を設け、技師・古川阪次郎を八王子の初代所長に、同じ技師・大屋

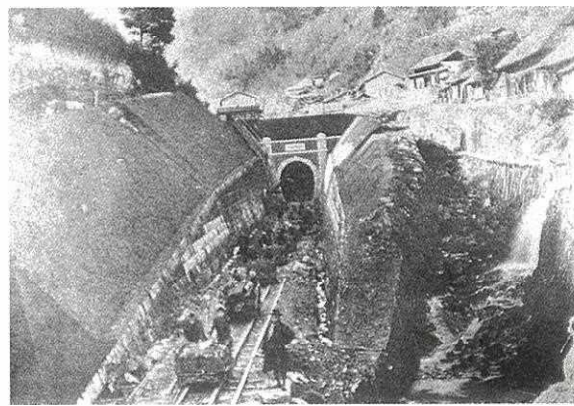


笹子トンネル縦断面図

中央東線の工事は、一八九六年十二月八王子―甲府間から着手した。東線は西線と比較してトンネル工事が多く、笹子（四六五メートル）、小仏（二五四五メートル）、またわが国鉄道線路中の最高位である鳥居（標高九七二メートル）など、総数六一か所、総延長二万五〇三二メートルを掘削せねばな

### 笹子トンネルの掘削工事

権平を名古屋の初代所長に任命した。一九〇五年には、日露戦争を背景として、甲府に陸軍の連隊が設置され、中央線は軍用線としての色彩を濃厚にしていったのだった。



小仏トンネル工事（2545メートル）

らなかつた。もともと鉄道局は創業以来、線路を迂回しても一六〇メートル以上のトンネルは掘削しない方針をとっていた。しかし、東線では一六〇メートル以上のトンネルは四か所を数え、とくに笹子トンネルの掘削が、全線の工事完成の鍵になるともいわれた。

この笹子峠越えは、測量の段階でアプト式とすることが検討されてきたが、軍部が軍事輸送の面からアプト式に強く反対し、長大トンネルの掘削が決定したのだった。建設予算額三八三万円。完成予定期



笹子トンネルで使用のアメリカ製削岩機

限八か年。工事は古川の案により直営とし、労務者の供給のみを有馬組の請負いとした。また工期短縮の点から、施工方法として、まず導坑を掘削し、のちこれを切り抜けてトンネルとする従来の方法に対して、導坑掘削と切り抜きを同時に行い、引き続きレンガ巻きをする方法を採用。一八九六年十二月東西両口から、手掘りとダイナマイトによって同時に着工した。

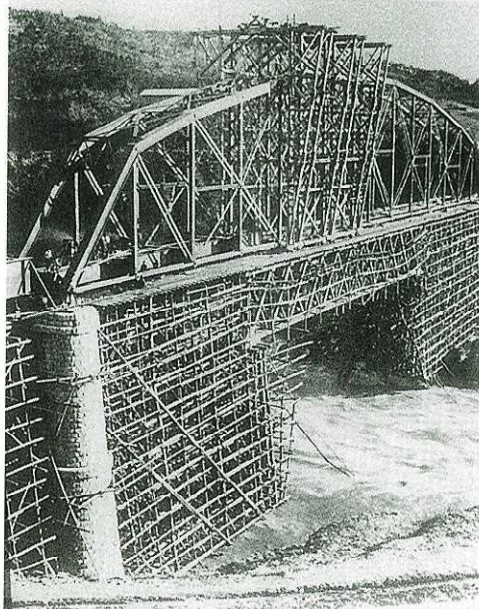
しかし、西口は日川の断崖にあつて施工できないため、やむなく約八〇メートル東方の側面より延長五五メートルの横坑を掘り、トンネルの中心部に達してから左右にすすめる方法をとった。地質は東西とも軟石だったが、湧き水が多く、しかもカンテラの照明で空気が極度に汚染されるため、東西両口の外に圧気機を、坑内にはアメリカ製

の削岩機を採用して工事をすすめた。この削岩機は篠ノ井線冠着トンネルとともに、わが国鉄道トンネルにおける最初の採用であった。

しかし一八九七年の夏には、赤痢の流行により労務者が不足、さらに翌年の経済不況に伴う予算の縮小など、工事は円滑にはすすまなかった。

一方、セメント、まくら木など工事資材の運搬も、山岳地帯の工事ゆえに困難をきわめた。トンネルより東方に配給するものは、東海道線（一九三四年以降、御殿場線）御殿場から籠坂峠を越えて六八キロの難所を運搬。また西方には、東海道線岩淵駅より富士川の急流を逆のぼり、鰍沢で陸揚げ、身延街道を甲府まで二〇キロ、さらに甲州街道を十六キロかけて勝沼に集め、軽便線、人力などによって各工事現場へ配給した。

こうして工事は予定より二年間も早く、しかも経費を節減して一九〇二年十一月に完成。これは、削岩機の採用、日川、笹子川を利用しての建設資材の運



第一木曾川橋梁トラス架設工事

搬など、一に古川のすぐれた指導力に負うところが大きかった。

### 最初の長径間トラス採用

中央西線名古屋〜宮ノ越間は、東線同様一八九六年十二月、名古屋方面から着工した。

トンネルは第二〇号楨ヶ根を最長として、総数三四か所、総延長九〇二六メートルを掘削。また橋梁は、庄内川を最長として二〇二か所、総延長四〇〇五メートルを架設した。

中でも日本三天急流の一つとして知られる木曾川には、中津川〜坂下間の第一木曾川橋梁（二四六メートル）、坂下〜三留野間の第二木曾川橋梁（二二メートル）に、最初の三〇〇フィート



第二木曾川橋梁（明治42年9月完成）

トラス桁各一連を採用した。両橋梁とも直営、橋台、橋脚は石造りで施工。

第一木曾川橋梁は一九〇六年六月着工。日露戦争のため一時中断したが、翌年十月に再着手。三〇〇フィートトラス桁一連と八〇フィート鉸桁二連を架設し、一九〇七年二月に完成。桁の架設は一九〇七年九月着工の第二木曾川橋梁とも足場式によった。

第二木曾川橋梁は、三留野駅の西方五〇〇メートルの河流がカーブした位置に架設した。急流で出水が多く、しかも冬期には上流からの流木が絶えず足場に撃突。また河中には大玉石が累々と横たわる悪条件下で、工事は困難をきわめた。

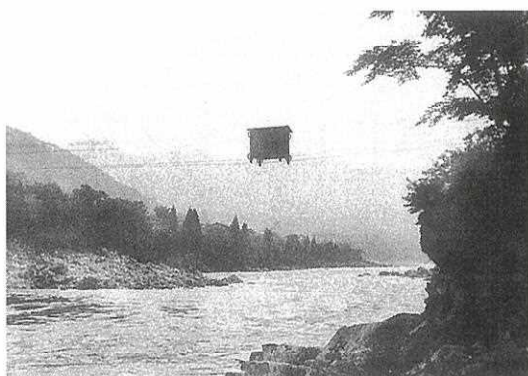


羅天（野尻〜三留野間）の石造擁壁

したがって橋脚の高さも二四メートルに設計。足場を使用した丸太は七六九七本もの多数に及び、架橋工事は、一九〇九年九月に完成した。

宮ノ越以西・木曾川に沿っては、風光明媚の地域で知られ、野尻〜三留野間の羅天は、木曾中の深山幽谷。名古屋方面に向かって右側は、木曾川の急流に臨んで断崖絶壁、線路の敷設が困難であった。したがって石垣を三段に築造してかろうじて線路を敷設した。三留野〜野尻間九・二キロの線路敷設工事は鉄道連隊に委託し、五四名の将兵により、二か月間で完成したのだった。中央西線の工事材料の供給も、東線同様容易なものではなかった。



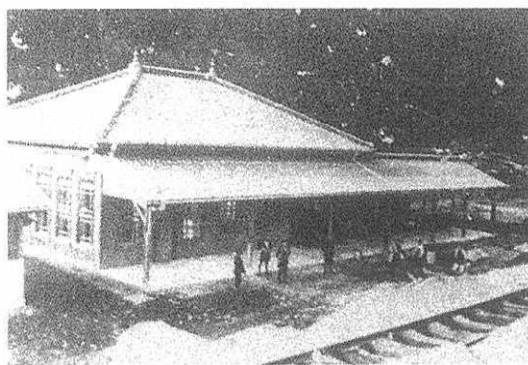


田立信号場付近の木曾川釣り越し  
(対岸への輸送・水面上の高さ約24メートル)

レール、橋桁等の重量物は、神戸と新橋から供給したため、いったん熱田駅で取り却し、熱田〜古渡間の建築支線を経由して、千種停車場まで敷設した仮り線によってトロッピーで運搬した。また、当時建設工事で大量に使用したレンガは、多治見まで土岐川を水運によって運搬した。

多治見〜中津間も、当初は馬車等を利用したが、多治見〜久尻間十二キロの区間は、土岐川に沿って、曲がりくねった山腹の道を、主として人の肩にかついで運搬したのだった。

中津以東の運搬方法も、主として馬車を利用されたが、雨や雪のさいには道路がぬかるみ、その困難は、筆舌に



中央線完成直前の木曾福島駅 (明治43年)

尽くせないものがあつた。こうした苦心の末、一九一一年五月、最後となった木曾福島〜宮ノ越間の工事完成により東西線が連絡。中央線全線の開通をみたのだった。

**中央線全線の工事報告**

一九一一年(明治四四)五月一日、名古屋の鶴舞公園で、鉄道院総裁・後藤新平ら関係者が出席して、中央線全線の盛大な開通式が挙行された。

この席上、鉄道院名古屋建設事務所長・加藤勇は全線の工事状況を次のとおり披露したのだった。

「本線は其延長三百二十四哩九分にして、総工費三千五百万円とす。即ち

一哩平均約十萬二千四百三十五円。一ヶ年工程約十五哩なり。

今其成績の重なるものを挙げれば、隧道九十五、此延長十一萬三千三百七十八呎余にして、一呎平均工費金九十九円二十五銭。就中管子隧道は二哩七十一鎖余にして、本邦第一の長隧道とす。

又、橋梁は三百五十箇所。此延長二萬四千二百六十五呎にして、一呎平均工費金百七十円六十八銭。其中第一、第二木曾川には各径間三百呎のトラスを用ふ。是れ本邦鉄道橋としては未曾有の鉄橋とす。

而して鳥居隧道は、海拔三千八百八十九呎余にして、本邦鉄道線路中の最高点とす。

其他、土工、石垣等に於ても他線に稀なるものあり。又溝橋の総数五百六、



管子トンネル題額(明治35年11月完成)

停車場の総数四十七とす。之を要するに、由来鉄道敷設の地多少険峻の区域なきに非ずと雖も、本線の如きは一部を除き、概ね陰山幽谷の間を通ずるものにして、紆余曲折或は巍々たる峰巒を越え、或は滾々たる河流を渉り、工事上の困難少なからざりしにも拘はらず、予定に先立つこと一年有余にして竣工せしは、実に欣躍に堪へざる所也……」

中央線工事の犠牲者は、管子トンネルだけでも死傷者が九九名(うち死者五名)を数えたのだった。

ちなみに一九〇二年の完成当時、わが国第一の長大トンネルだった管子トンネルには、その完成を記念して、東京(東京側)に「因地利」(伊藤博文書)、また西口(甲府側)には「代天工」(山県有朋書)の文字が刻み込まれた。

当時これだけの大仕事をやりとげた、その土木技術は歴史上永遠に輝くものであるう。

「さわ・かずや」交通史研究家。徳島県出身。日本国有鉄道総裁室修史課で「日本国有鉄道百年史」の編集・執筆にあたる。著書に「日本の鉄道二〇年の話」「鉄道に生きた人びと」「鉄道―明治創業回顧談(いずれも築地書館)など。

# 高校生も参加する、スローでやさしいまちづくり

## 吾妻高校福祉科の生徒とふくし・ふれあいロード計画

**福祉科のある高校と  
大きな総合病院が特色の町**

群馬県北西部に位置する吾妻町は、高崎から電車で一時間ほどの人口一万五〇〇〇余が暮らす山に囲まれた静かな町である。中心市街の原町は中之条盆地の一面にあり、南東部は榛名山の山麓に連なる。幹線道路の国道沿いには郊外型の大型店舗が建つが、町域の多くは山か田や畑が広がるのんびりとした風景が続く。町内には縄文時代の郷原遺跡や弥生中期の岩櫃山遺跡などがあり、太古の昔から人が集まり暮らす場所であったことを示し、近世初頭からは市場町として発展した。現在は農業が産業の中心だが、自動車部品や電子部品工場なども進出しており、町の経済の一端を担っている。

JR吾妻線群馬原町駅周辺には、駅の南側に町役場があり、その北西に県内に二つしかないという赤十字の総合病院がある。半世紀にわたり地域医療を支え、一昨年新たに施設全体を建て替えた。現在二〇〇以上の病床を擁する大規模で近代的な病院に生まれ変わり、毎日多くの患者や関係者が訪れている。さらにその病院の先、駅から歩

いて五分程度の場所に、群馬県立吾妻高校が建つ。創立八五年という歴史ある女子校で、普通科、商業科、福祉科の三科があり、四六四人の生徒が日々勉学に勤しむ。中でも福祉科は四年前に創設された学科で、保健福祉理論や実践的な介護技術などを学ぶ。群馬県内では、唯一福祉科のある高校としても知られている。そして二年前福祉科の生徒が、まちで新たに整備する予定の道づくりに、提言というかたちで参加することとなったのだ。

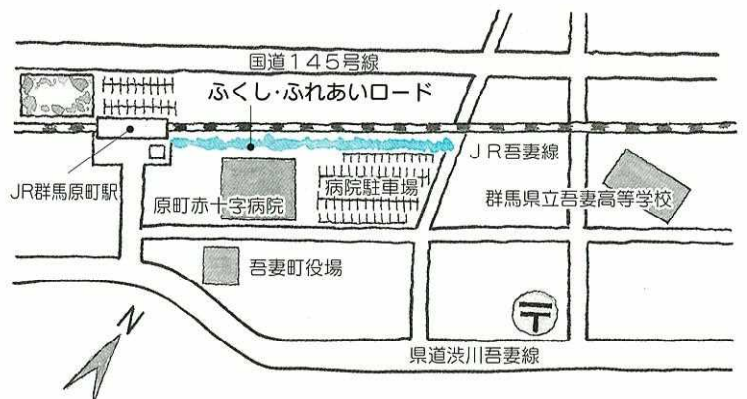
### 福祉をテーマにした まちづくり

整備の対象となった道は、病院の北側にあった。病院と線路に挟まれた狭隘な通路で、病院建て替えを機に四メートルの道幅を拡張する整備を行うことになったのだ。この道路は駅と病院をつなぎ、吾妻高校の生徒の通学路として使われている。駅南側のエリアはかつての賑わいがなくなっていて、かなりさびしい雰囲気となっていたので、町ではこの道と、道につながる駅周辺をどのように整備したらよいか、改めて検討することになった。

まず町内の有志が一七名集まり、二



吾妻高校正門



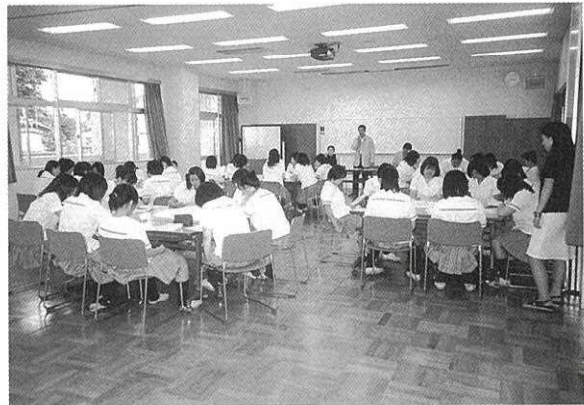
JR群馬原町駅周辺

〇〇〇年七月に「はらまち駅前ふくし・ふれあいロードを考える会」（以下「考える会」）を発足させた。会議では病院があること、また福祉科のある高校があること、そしてその双方が関係する道ということで、福祉をテーマに歩行者専用の道づくりを行う方向で話が進められていく。二年間に、十数回に及ぶ話し合いと提言するための活動が積み重ねられ、その成果を昨年六月答申にまとめて町へ提出した。そして昨年十二月、駅南地区全体の福祉のまちづくりを考える「駅南まちづくり連絡会」（以下「連絡会」）が具体的な提言を行った。現在、こうした答申と提言をベースにしたプランのプロポーザルを行い、実際に計画策定を担当する事業者が決定したところだ。

## 日ごろの勉強を生かした タウン・ウォッチング

道の全長は約二五〇メートルと、それほど長くはないが、「考える会」と町は、道の利用状況や、どんなところに不便を感じているか、何が気になるかなど、実際に歩いている人、利用する人の声を把握するため、アンケートとタウン・ウォッチングを実施した。

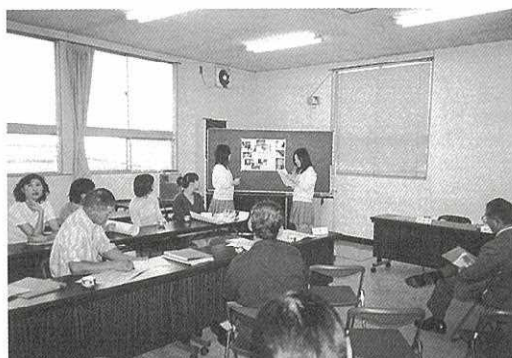
## 2001年 吾妻高校福祉科の タウン・ウォッチング



7月12日 主旨説明会



7月25日  
タウン・ウォッチングと  
話し合い



9月25日 「考える会」の会議で発表

アンケートでは周辺の住民をはじめ、病院に通う人、駅を利用する人、吾妻高校の生徒など、一〇〇〇人からの意見を集約する。さらにタウン・ウォッチングでは、吾妻高校の福祉科の生徒と日赤病院の看護師に、実際にまちを歩いてもらい、専門知識をもつ人の目を通して、道を検証した。

町の要請に、高校側は二年生四〇名全員が参加というかたちで応じた。一昨年七月行われたタウン・ウォッチング当日は夏の暑い一日だったが、八名ずつ五グループに分かれた高校生は、



7月30日 まとめの議論と校内発表会。  
右は、テーマを「安全な通学路のために」とした1班のプレゼンテーション



各々メモや写真をとりながら、気になるところをチェックしていった。後日撮影した写真とチェックポイントを書き込んだ用紙をつくり、その成果を「考える会」の会議で発表する。高校生は、道の段差や幅員の狭さによる危険性や外灯の必要性を指摘したり、道が殺風景だという意見もあった。二年前に参加したという斎藤麻木子さん、岡部綾子さんは「タウン・ウォッチングの経験から、原町は全体的に細い道が多くて危ないと思うところをたくさん見かけました。高齢者の方も多いので、その人たちのことを考えると、このままではちよつと歩きにくい町だなあと気づきました。福祉の勉強をして、町の見方も変わってきましたね」と、

当時を振り返った。また、高校生たちは道の問題点を指摘するとともに、利用する自分たちにできることとして、道の清掃や花壇づくりなど、見過ごされがちな、維持管理や楽しく歩くことのできる道づくりの提案もしている。

町の担当課である建設課の小林一喜氏は、「今の高校生にどんな提案ができるのかと思っていた。いざ実際にやってみると、自分の考えをきちっと出した素晴らしいもの」と感心しきり。

福祉科の高校生の真摯な取り組みが、特に印象に残ったようであった。

そもそも、学校ではボランティアを募り定期的な町の公園を清掃したり、学校内外のゴミひろいなどを実施している、町からも高校の活動に高い評価と信頼を寄せていた。また、マンドリンクラブでは毎年病院へ出張して演奏会を開くなど、地域に密着した活動が行われている。そうしたオープンな関係が下地になり、今回のタウン・ウォッチングと道づくりの提言につながっていったのであろう。

### 「対話型まちづくり」の先例

こうした住民参加のまちづくりは、住民と吾妻町だけでは十分に進めなかったという建設課の小林さん。従来の方法であった、役場で計画してできなかったものを住民に提示して進める事業とは、何から何まで違っていった。新しいやり方が進められたのは、県のバックアップ態勢も大きな力となった。「どういう風にすすめるか、また、具体的に住民はどう動けばよいのかを適切にアドバイスしてもらった。それに、県が資金を補助するまちづくりの専門家の派遣事業がたいへん役立った」と



原町赤十字病院協の「ふくし・ふれあいロード」予定地



原町赤十字病院

ワークショップに参加した斎藤さん(左)と岡部さん(右)



2003年6月7日に行われた「ふくし・ふれあいロード」予定地の花植え。吾妻高校の生徒もボランティアで参加した。



病院正門前の道路。体の不自由な人には少し歩きづらい

## 「連絡会」がまとめた提言

提言の前提となった「考える会」の答申は、これからの吾妻町のまちづくりに関して、「福祉」の視点を加えることを強調。ふくし・ふれあいロードは、「リハビリ散歩道」としての機能をもたせ、さらに駅周辺の広場や通路を有機的につなぐ整備を住民が望んでいるとまとめた。そして、この事業を住民と行政が一体となって取り組むことが盛り込まれている。

こうした答申を踏まえた「連絡会議」の提言の主な概要は、「ふくし・ふれあいロード」を生活道路とするが、一方で町民の健康増進や通院・入院患者が利用できるリハビリ道路とすること。またこの道を拠点に、園芸作業や福祉バザーなども行えるようにすること。また舗装は歩いた時の感触を重視してソフトな木質舗装としたり、地域に合った色を使うなど、個性的な道づくりを要望した。また、駅周辺ではトイレ整備を優先課題として、ユニバーサルデザインの視点から障害者専用というより、多機能のものをつくり、入ってみたいトイレになるような整備をする。さらに現在分断されている駅南北を自由に行き来できる通路を開設することなどを求めたものになった。

いう。「考える会」のアンケートやタウン・ウォッチングの方法を指導したのは、そのまちづくりの専門家が代表をつとめる「NPOぐんま」。専門的な知識をもち、しかも住む人、生活者の立場からまちの活性化や環境整備などのアイデアを出したり助言をして、住民と行政の間をとりもつ重要な役割を担っている。吾妻町では、整備の話が持ち上がったからすでに三年が経つが、住民が何度も何度も話し合いを重ねつくりあげた答申や提言には、気持ちよく楽しく歩くことのできるような、たくさんさんの思いの詰まった道のイメージ

ジができてあがっている。

事業のスピードや効率に捉れず、じっくり時間をかけたスローなまちづくりの実現に向けて、着実に歩を進めているところといえよう。町では、せっかくここまで来た動きを、計画倒れにならないよう、時間がかかっても確実に進めたいと抱負を語った。

タウン・ウォッチングに参加した齋藤さんと岡部さんは、学校を卒業して他町で働きはじめているが、この道路の完成を心待ちにしていると語った。

取材 西山麻夕美（フリーライター）  
イラスト 河合睦子

### 全 体

- ・段差の解消などバリアフリーに配慮する
- ・幅員4mを基本とする
- ・幅員内に排水施設、植栽部分を設ける
- ・赤十字病院の植栽部分をポケットパークとして、開放していただけるようお願いする

### ポケットパーク

- ・ベンチ
- ・屋根
- ・水飲み場
- ・木陰
- ・健康歩道



### 植 栽

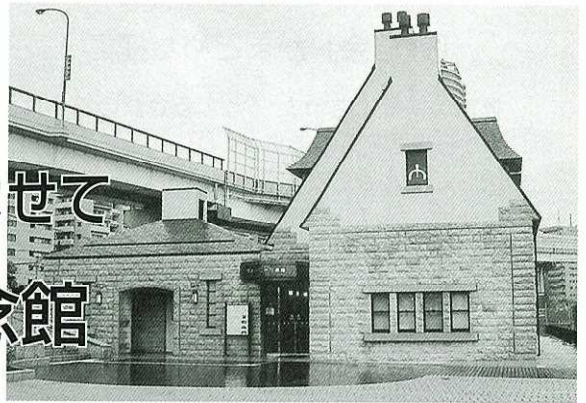
- ・鉄道脇の植栽
- ・低木
- ・花木
- ・草花花壇

### 路面舗装

- ・透水性アスファルト
- ・ポケットパーク前後は木質チップシリコン系
- ・路面の色に配慮

※提言を元にしたイメージ図です

# 近代産業の黎明期に思いをはせて ヴェルニー公園・記念館



(平成 15 年 5 月 15 日に)



## ヴェルニー記念館

開館日 9:00～17:00 入館無料  
休館日 毎週月曜日・年末年始  
お問合せ TEL 0468-24-1800

神奈川県横浜須賀野市は、ペリーが来航した浦賀を擁すなど、日本の開国とそれに続く近代化に深く貢献した土地柄である。江戸時代末期、当時の最先端技術であった製鉄所（実際には造船と修理の施設）の建設地に選ばれたことから、関連する施設やそれを支える人々を育成する機関が整備され、一寒村から急速に近代化の先進地へと変貌を遂げた。その建設地を選定し、近代産業の社会的システムの立ち上げに尽力したのが、フランスの海軍技師・ヴェルニーであった。

昨春、横浜須賀野市の玄関であるJR横須賀駅前に、彼の功績をたたえてフランス式庭園「ヴェルニー公園」と「ヴェルニー記念館」が完成した。

## お雇い外国人・ヴェルニー

一八六六年、フランソワ・レオンス・ヴェルニーは、横浜製鉄所建設の責任者として徳川幕府に招聘され来日。明治維新後も日本にとどまり、横浜製鉄所や観音埼灯台、湧水型近代水道施設「走水源地」などの建設を指揮しただけでなく、製鉄所内に技術学校「覺舎<sup>こしや</sup>」（後に東京帝国大学工学部へ引き継がれる）を設け、恒川柳作（国指定重要文化財・旧横浜船渠二号ドックを手がけた）をはじめとする多くのエリート技師たちを輩出した。

彼は、二八歳で来日してから約十二年間を日本の近代化に捧げた。

## 潮風が心地よいヴェルニー公園

ヴェルニー公園は、長年市民に親しまれてきた臨海公園を新たに整備したもので、対岸にヴェルニーが建設に係わった旧横浜製鉄所が一望できる。

海沿いに細長く広がる園内には、潮風を感じながら散歩できるボードウォーク、祭事を行える開明広場、約二〇〇本のバラ（フランスの品種二四種、日本の品種五種）の花壇や噴水なども配されており、四季を通じて楽しめる



ヴェルニーの胸像とバラが咲き誇る公園内

市民の憩いの場となっている。

開明広場の一角には、ヴェルニーと製鉄所建設に尽力した幕府勘定奉行・小栗上野介忠順の胸像が旧横浜製鉄所に向かって佇んでおり、その姿に近代日本の礎を築いた情熱と崇高な志を偲ぶことができる。

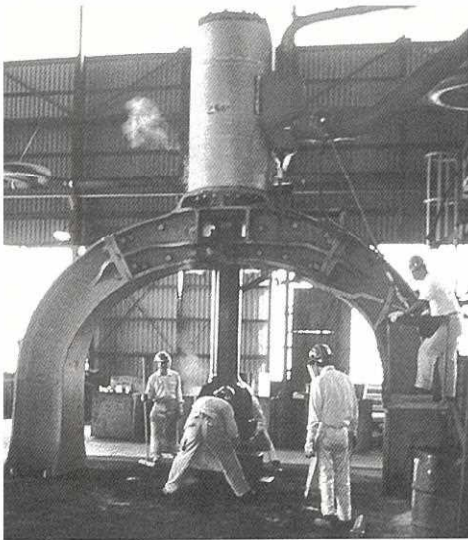
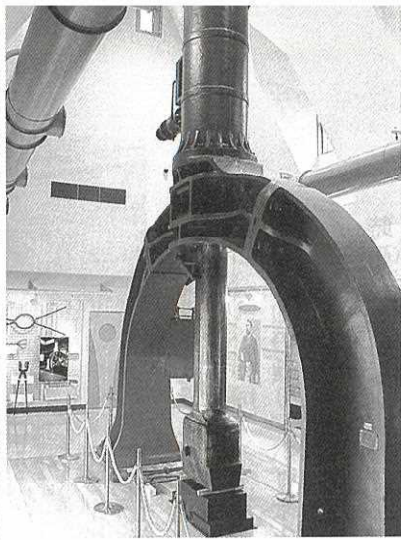
毎年十一月には、日本の近代化に貢献したことを顕彰する「ヴェルニー・小栗祭」が開催されている。

スチームハンマーの迫力に触れる  
ヴェルニー記念館

公園内にあるヴェルニー記念館は、

彼の故郷フランスのブルターニュ地方の民家をモチーフにして建てられ、開館から一年間で約六万人が訪れている。館内にはヴェルニーの業績紹介や横須賀製鉄所で使われていた三トンと〇・五トンのスチームハンマー（二基一組で国指定重要文化財）などが展示されている。

スチームハンマーとは、蒸気の力でハンマーを持ち上げ、そこからの落下で金属を加工するもので、横須賀製鉄



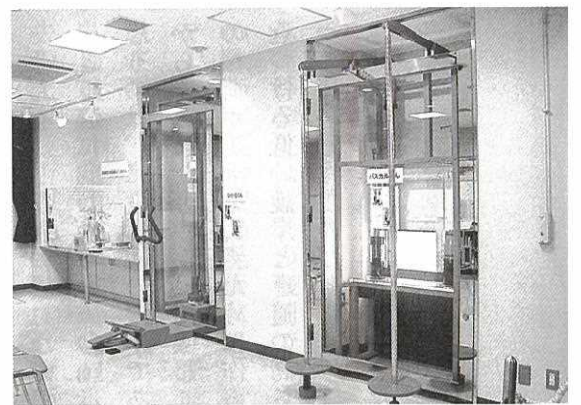
展示されている3トンスチームハンマーと稼動時の様子

所では、シャフトや金具といった船の部品を製造していた。幕末にオランダから輸入され、〇・五トンは一九七〇年まで、三トンは一九九六年まで稼働し、輸入元のオランダにもこの時代のものは残っていないようだ。

三トンハンマー稼働時の写真には、機械を操作する人、製冶型を加工する人、近くで見守る人が一組になって作業を進める様子が写されている。加工する製品によりハンマーの力を調節したり、下ろすタイミングをはかったりと、まさに職人技の世界である。

現在、スチームハンマーは動かせる状態で保存されているものの、館内で実際に動かすことはできない。そのため、精巧に再現した一〇分の一の模型が展示されており、日曜日や団体の申し込みがあれば実際に蒸気で動く様子を見学できる。小さいながらも、その鈍音はかなり大きく、本物であればどれほどの迫力だろうか。

「実際に蒸気で動く様子を見せると、途端に子どもたちは興味を持つようですね。本当は、分解して手入れする様子も公開できると、もっと科学に興味を持ってくれると思うんですが、そういったソフト面の整備はまだこれから



「パスカルくん」と「ひかるくん」

です」と横須賀市自然・人文博物館の学芸員・菊地勝広氏は話す。

また、記念館では、子どもたちの科学や産業技術への興味を刺激するように、小さな力で重いものを持ち上げる「パスカルくん」や、ペダルを踏んで持ち上げたおもりが落ちる摩擦で光を発生させる「ひかるくん」などの体験器具を設置している。仕組みはシンプルだが、子どもだけでなく大人も一度は試してみたい人気の展示である。

そのほか、横須賀市を紹介したビデオ「横須賀製鉄所を育てたまちースチームハンマー・近代化遺産・現代のヨコスカ」、スチームハンマーの仕組みや鉄鋼のリサイクル、先端技術といった話題をわかりやすく紹介したビデオ「鉄を打つ―その技術と未来」を

### 未来に受け継ぐ進取の気風

毎日上映するほか、毎週土曜日には月替わりで産業映画を上映している。

ヴェルニー記念館を管理する自然・人文博物館では、市内に残る旧海軍施設や水道施設、大正・昭和初期の文化住宅や町並みなどを巡り、横須賀ならではの魅力を再認識するイベントを行っている。

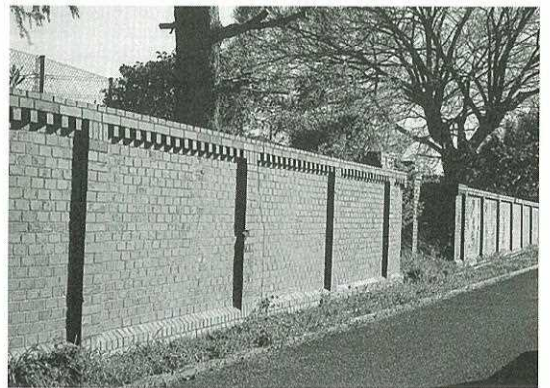
ヴェルニーが整備した走水水源地の水道が現在も横須賀市民の喉を潤し、横須賀製鉄所の石造ドライブックも在日米軍横須賀基地において現役で稼働しているというのは驚きだ。多分、それはヴェルニーが優れた技術者であったというだけでなく、当時の日本人技術者の近代化への熱意があったからこそではないだろうか。

今年がペリー来航一五〇周年にあたり、横須賀市ではこれを記念して「よこすか開国祭」（八月一〜三日）を開催する。開国以来育まれてきた文化・歴史資産・地域資源を最大限に活用するというこのお祭りでは、横須賀の魅力がどのように発信され、次世代に伝えられていくのか楽しみである。

（取材・小野久美子）



右：日本煉瓦製造（株）  
深谷事業所裏の煉瓦塀



左：専用鉄道跡地

煉瓦の運搬は当初、利根川の水運を利用していた。明治28年に、工場から深谷駅まで専用鉄道を敷設し、鉄道での運搬に切り替えた。日本初の民間企業による専用鉄道として有名。現在は、市の遊歩道（あかね通り）として整備されている。

耐震性が低いことを意味しない。

煉瓦造は、積み上げる煉瓦間にモルタルを充填し接着する。良い仕事をしたモルタルの付着力は煉瓦の引張り強度よりも強くなる。このため、地震による破損は、モルタルに引張り張られる形で煉瓦表面に現れるはずである。ところが、関東大震災後には、数多くの中古の煉瓦が、一時的に市場に出回ったとの記録があるという。中古の煉瓦が出回ったということとは、容易に煉瓦をモルタルから剥がすことができたことを意味する。このことは当時の被害原因が、目地強度にあったことを示している。

現代の技術水準をもってすれば、煉瓦、モルタルともに、当時より強度性能が良く、品質的にも安定したものが得られるはずである。そして実験等に裏付けられた仕様に基つき、十分な強度の煉瓦と目地を用いれば、煉瓦造の建造物の耐震性に問題はないはずである。現代の問題は、このような当り前のことが知られていないことにある。

例えば、職業能力開発促進法に基づく技能検定に、コンクリートブロック積みはあるのに、煉瓦積みは無い。こうしたことに、煉瓦造が市民権を持ち得ていないことの一端がうかがえる。

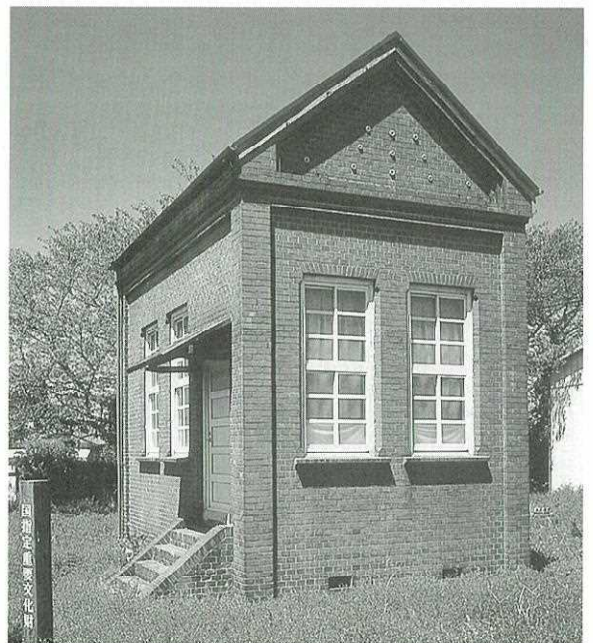
## 煉瓦の品質

現代は、技術水準の向上により、安定した品質の煉瓦が得られる。建造物の保存という仕事においては、このことがかえってマイナスに働くこともある。例えば、最近保存工事が終わった日本工業倶楽部会館の修復で

は、外壁に復元した煉瓦がどうしても均質に焼きあがってしまったため、建設当時の外壁のようにむらのある色あいを復元することに骨を折ったという。

日本煉瓦の敷地に保存されているホフマン輪窯で焼いた煉瓦は、焼き上がりが不均質であったようだ。当時、日本煉瓦では焼き上がりの状態に応じて、煉瓦を十五種類に分類し管理していたという。これに対して、現在の日本煉瓦の製造設備は、昭和中期に更新し、効率的に色むらのない均質な煉瓦を製造できる設備を備えている。

均質ではない煉瓦が好まれるのは、保存の現場だけではない。近頃のガーデン



旧変電室（国指定重要文化財）

明治39年に日本煉瓦が高崎水力電気株式会社と契約、現在の深谷市に最初に電灯線が引かれた時の建設。

ングブームによってホームセンターで売られている煉瓦も、角の取れた色むらのあるものだという。

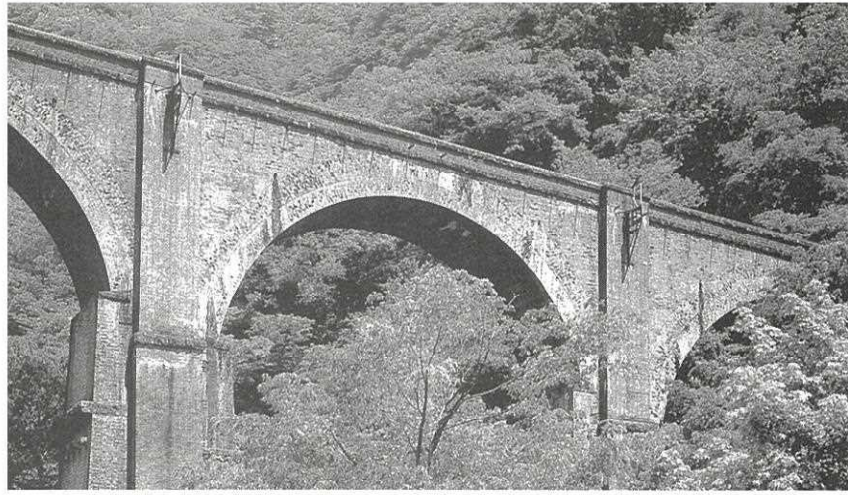
日本煉瓦では、時代の要求する煉瓦を製造するために、通常の製造工程に角を取る工程を追加したり、焼成温度を調整したりするという。均質化を目指した現代の設備で不均質な製品をつくることは、なんとも面白い話である。

## 保存工事に使われる煉瓦

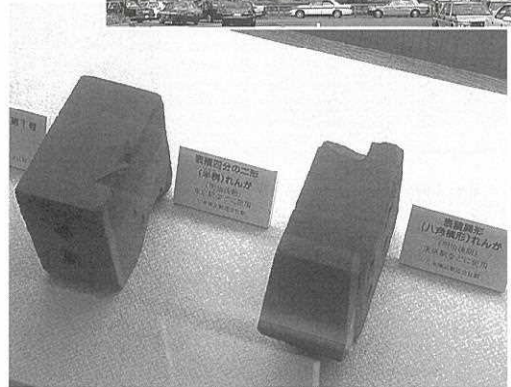
歴史的建造物の保存工事に使う煉瓦は、日本煉瓦では特別注文品という扱いである。復元煉瓦の製造にあたっては、色見本用に三種程度程度の現物をつくり検討する



左：信越線碓氷第三アーチ橋、明治 26 年建設



下：東京駅中央正面  
東京駅に使用されている煉瓦、日本煉瓦史料館に展示



ことが多いが、色の決定にはいつも苦勞するという。煉瓦の赤い色は土中に含まれる酸化鉄が反応することによって発色する。色は焼成温度を変化させることで調整することができる。けれども、同じ産地の土であっても、採掘場所によって、組成の違いから微妙に色合いがかわる。これが苦勞の種になるのである。

寸法にも色と同じく苦勞がある。煉瓦の寸法は、焼く前と焼き上がり後では異なる。いわゆる焼き締めである。この寸法変化も焼成温度によって違ってくる。このため、保存する建造物と同一寸法の煉瓦は、それほど簡単には造れないのである。

このような諸条件を巧みに調整するこ

とで、建設当時と同様の煉瓦が復元できる。けれども、佐々木氏は言う。「昔の煉瓦と今の煉瓦の違いはない。原料をこねて成形し焼く、ただそれだけで、基本的には同じだ」と。この言葉には、長年の経験を積んだ技術者の重みがある。

## 凍結融解

煉瓦をつくる上での苦勞は、復元以外にもある。その代表的なものが、凍結融解への対策である。

凍結融解とは、材料中に含まれる水分が凍結によって体積を膨張させ、材料を破壊する現象である。凍結融解への脆弱は一般的に材料の吸水率によって判断される。JISでは煉瓦の吸水率を一〇%以下にするものと定めている。

日本煉瓦では、吸水率八%の煉瓦を製造しているが、同じ製造方法であっても、深谷の上を焼いたものより北海道の土を焼いた煉瓦の方が、凍結融解に強いことが多いという。このため、日本煉瓦では凍結に強い煉瓦の注文を受けた時には、北海道の土を勧めるという。

このように地域の土の特性が煉瓦に反映されることの科学的な根拠は見つかっていないという。材料に関する技術開発の難しさと面白さは、こういった点にある

るように思う。

## おわりに

今回の取材にあたって、「遺産を保存するために煉瓦を造り続けているわけではない。会社として煉瓦を造ることを業としていただけだ」というお叱りを、佐々木氏からいただいた。まったくその通りである。

歴史的建造物の保存工事は、とても特殊な工事だと思われがちである。けれども、これは誤っている。日本煉瓦の煉瓦のように今でも活かしている技術があれば、一般の工事と変わらない条件で、標準的な価格の範囲で保存工事を行うことができるのである。これは工事担当者にとつては、大変ありがたいことである。

日本煉瓦には今後も同じ姿勢で煉瓦を製造し続けてもらいたい。本来、伝統技術というものはこうでなくてはならないと思う。日本煉瓦の煉瓦を使った東京駅が、容積の譲渡等を利用して当初の三階建てに復元されること。復元の際には是非、建設当時と同じ日本煉瓦の煉瓦を使ってほしいものである。

### 【参考文献】

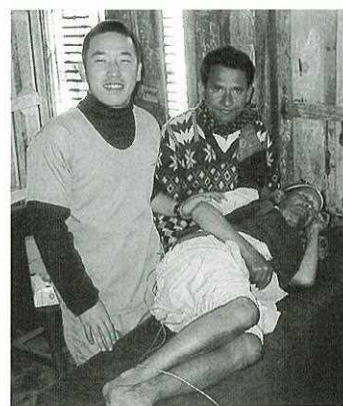
『日本煉瓦一〇〇年史』日本煉瓦製造株式会社



# ●ネパール● 子供たちの 輝く未来のために

厚生省特別法人ネパール癌協会  
内務省法人ヒマラヤ青少年育英会

吉岡 大祐



医療キャンプで治療する吉岡氏(左)

私がヒマラヤの国ネパールに暮らしはじめて、五年が過ぎようとしています。

日本の人々が抱くネパールのイメージは、ヒマラヤの大自然、そして、そこに暮らす純朴な人々ではないでしょうか。しかし美しい大自然に囲まれて暮らすネパール国民の大多数が、実は想像も及ばないような貧しい住環境で暮らしていることはあまり知られていないようです。長年の歴史に支えられた住まいは、日干し煉瓦と土、牛糞で仕上げ、低層で細かく区切られた、おとぎ話の様な空間ですが、そこに三〇数名が肩を寄せ合い、大家族で暮らしています。

近年は都市部においてプロパンガスが普及しましたが、まだまだ炊事には薪を使い、家の中には排煙設備がないため、眼科や呼吸器科の疾患が多いようです。このような住環境ですから、私もネパールへ住み始めた頃は、いつ地震が来るかとても不安でした。しかしネパールの人々は、穏やかで大様な性格ですので、『二〇〇年しないと地震は来ないよ』と、

のんびり構えています。近代的な住居に不自由なく暮らす日本人に比べ、むしろゆったりと生活を楽しんでいます。時々、どちらの暮らしが豊かなのか、私自身が懐疑的になることもあります。

私は平成十年、日本の鍼灸学校を出ました。将来の進路に夢と不安を持っていた折、父の友人であるネパール人社会福祉活動家ダルマ・シルパカール氏にお声をかけていただき、ネパールへの道が開けました。もちろんネパールの実情など分からないままトリヴバン大学へ入学し、大学生活を送りながら、余暇を利用して近所の老人達に無料鍼灸治療を施してきました。こうした老人達への治療を通して、ネパール社会を垣間見ることが出来ました。(ネパールでは鍼灸は医療です。)

どの国でも人間の優しさと思いやりは同じです。貧しい人々にも豊かな人々にも優しく対応することで、もちろん無料治療ということもあり、一年を過ぎる頃には噂を聞いて、山の村から徒歩で何時間もかけ、治療に訪れる患者さんまで現れました。これ

には大変驚きましたが、貧しさと共に厳しい医療の現状を知ることが出来ました。

当初は三年間の大学生活を終えた後、帰国の予定でしたが、鍼灸治療を求める貧しい老人がある日、「心ばかりですが…」と言いながら、村で穫れた貴重な食料であるトウモロコシを私のために持って来てくれました。トウモロコシが、老人の住む村で特別貴重な食料であると知ったとき、私は感動で胸が潰れる思いでした。「この患者さん達のために自分の力の続く限り、優しく誠実に自分の青春を掛けよう」と決心しました。

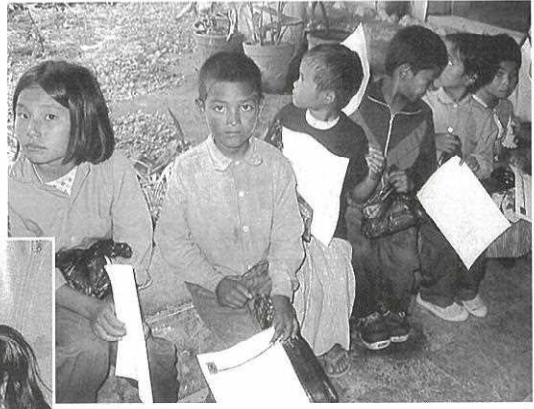
治療を担当させていただいた政府高官の方の引き合わせで、平成十二年からネパール癌協会が交通の便利な所に治療室を提供してくれることとなり、これを契機に私は大学を休学し、癌に苦しむ人々を中心に、貧しい人々への無料鍼灸治療を続けております。

こうして多くの人々の治療を続けるうちに、友人の内科、外科、歯科などの外国人医師達と共に、僻地、僻村での『医療キャンプ』に参加するようになりました。三泊および四泊程度のキャンプですが、実はそこで私は大きな発見をしました。各医療キャンプ地で会う子供達が天真爛漫、底抜けに明るく美しい笑顔なのです。しかし、この子供達の将来は、日本では考えられないほどの貧しさが約束されてしまっているのです。

貧困のため小学校を卒業できるのは、僅か二〇%



▲配られたノートに大喜びの  
子供達



▲ストリートチルドレンを対象とした医療キャンプ



◀「土木の絵本」やビデオで日本のことを学ぶ

程度、子供達は教育を受ける機会がほとんどありません。教育を受けていないため文字すら読めず、子供達は基本的な知識を手にすることが出来ません。そして、肝炎や破傷風などの感染症に対しても『予防』が出来ず、沢山の子供達が亡くなります。また、毎年何千人もの子供達が隣国へ人身売買されている、悲しい現実もあります。

子供達と話しますと、彼らは明るい笑顔で将来の夢を語ります。「学校の先生になりたい」「看護婦さんになって人を助けたい」子供達の夢は本当に限りなく広がります。しかし、彼らを待ち受ける将来は、まぎれもなく過酷な現実です。貧しさの影響を受けるのは、常に弱い立場の子供達なのです。

そうした目を覆いたくなる様な子供達の成育環境を見るにつけ、少しでも私の技術と情熱を、ネパール社会と子供達の未来のために役立たせたいと思うようになり、パタン市長のブッディラーージュバジユラチャルヤ氏らと共に、『ヒマラヤ青少年育英会』の設立に参加し、僅かな基金を持ち寄って十二名の子供達の就学支援から活動を始めました。

年一百万円の基金で、一家族三名の子供のうち一名を就学させ、二名の幼い弟たちの学用品の補助が出来ます。ヒマラヤ青少年育英会では、家庭環境が貧しい中で、一生懸命頑張っている子供達を優先に、就学支援を続けております。日本の方々から善意のご協力を得て、昨年は六〇名の子供達の、就学の夢を叶えることが出来ました。

今年には北海道に本拠を置く、クラーク記念国際高校（三浦雄一郎校長）のご支援の下、現地で小学校建設が予定されています。これも日本の人々の温かい善意が実を結び、大変うれしく思っています。クラーク記念国際高校では、毎年十数名の厚志ある生徒さんがネパールを訪問し、子供達との素晴らしい交流活動が続いています。

また、プロスキーヤーであり、学校長である三浦雄一郎先生には、ヒマラヤを冒険される度に、子供達の前で『夢を持つ素晴らしさ』や『チャレンジピリット』についてお話いただいています。先生のお話を聞いて、瞳を輝かせる子供達を見るにつけ、具体的な目標を持ち、一歩一歩努力することの大切さを、ぜひ子供達に植え付けたいと願っています。

どうか皆さん、是非一度、雄大なヒマラヤを訪問し、ネパールの現状を見てくださいます。そして、皆さんの優しさでネパールの子供達を励ましてください。夢が一步、二歩と彼らに近づくことは間違いありません。

#### 連絡先

ネパール内務省法人 ヒマラヤ青少年育英会

ネパール事務局

G.P.O.Box:8975, EPC:2025, Katmandu, Nepal

Tel: 977-1-5525386 Fax: 977-1-4434652

dominic@wlink.com.np (国際部: 吉岡)

日本事務局

〒104-0061 東京都中央区銀座1-9-8 207

Tel: 03-3567-4800 Fax: 03-3567-4801

## 戦

前の内務省土木局を代表する技術官僚のひとり青山士（一八七八〜一九六三）は、東京帝大土木工学科を卒業すると、恩師広井勇や信仰の師内村鑑三の助言を受けて米国に単身渡った。米国が計画したパナマ運河開削工事に参加するためである。彼が唯一の日本人技術者として巨大プロジェクト・パナマ運河開削事業に携わり高い評価を受けたこと、パナマでの七年半の苦闘が帰国後の技師青山の心の支えになったことなどはよく知られたことである。

私は「工学博士広井勇評伝」を書きあげるため最終調査として今年五月米国を再度訪ねたが、最初の訪問地シアトルで一日の時間的余裕が出来たことから「あること」を思いついた。それは今からちょうど一世紀前に青年青山がこの地に国際航路で到着しており、それを裏付ける公文書類が確認できないかとの思いだった。市立図書館や市立公文書館などにしかけたがダメだった。ワシントン州立大学図書館東アジア資料館に出向いて相談した所、シアトル郊外に米国立公文書館分館があるので、

## 発見！青山士の米国入国記録



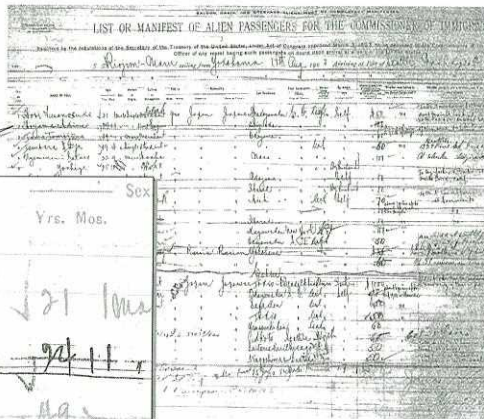
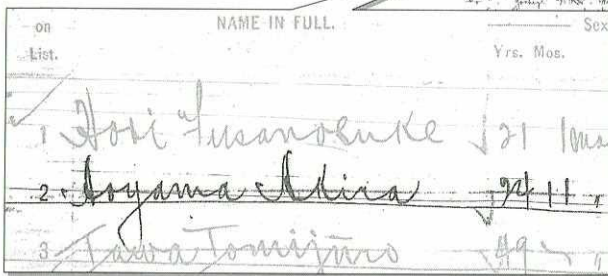
高崎 哲郎 (たかさき・てつろう)

独立行政法人土木研究所  
客員研究員・作家

そちら出向いてはどうかとの助言があった。

最後の望みを託して、車を飛ばして出かけた時には閉館の時刻が迫っていた。担当の女性は、膨大な入管記録（マイクロフィルム）の中から明治三六年（一九〇三）八月のものを取り出してくれた。拡大映像にし

提供：米国立公文書館（シアトル）



てリールを次々と入念にチェックしてみたが、見つからない。最後に、乗船した船が「旅順丸」だから、船の名前が旅順丸と書かれたものを中にチェックしてみた。閉館時刻

が近づいた時、私は「Aoyama Akira」と書かれた入管記録を乗船者名簿の上から二番目に見つけた。嬉しかった。叫びたかった。初めてアメリカ国内の足跡を公文書で確認できたのである。

記録によれば、旅順丸は八月十一日に横浜を出て同月二六日にシアトルに入港した。二四人の日本人乗客がいた。Aoyamaは二四歳十一ヶ月で、「civil engineer」であり「Shizukakken」の出身である。渡航費は自費である。カナダのウィクトリアで下船したとも記されている。だがシアトルに上陸しているところから判断すると、船長か同船者が旅費を支援して目的の地まで到着させたのではと想像する。

私が発見を喜んでしていると担当した女性たちも声を上げて喜んでくれた。私のような史実を調査して文章を書くことを生業にしている者にとって、小さな史実でも確認できたときの喜びは何にも代えがたい。いわんや外国の地にあつて確認できたときには最高の喜びである。その後の米国取材は順調であった。

『街かど景気の経済学』

新観測システム  
「景気ウォッチャー調査」



岩城 秀裕 著  
PHP新書  
700円

テレビCMで頻繁に広告宣伝している商品よりも、口コミで広がった商品の方が使ってみるとよかったというのはよくある話である。それと似た景気判断調査が、「景気ウォッチャー調査」である。

この景気ウォッチャー調査とは、内閣府が、各地域においてモニターを選び、三カ月前と現在の景気を比べて、よくなっているか否かを理由付で回答してもらった統計手法であり、いわば口コミの調査統計である。このユニークな調査手法について紹介しているのが本書である。将来本調査のようなシステム等を充実させ、様々な情報を提供することが将来の日本の市場活性化へとむすびついていくであろう。

(H・I)

『五感で楽しむ東京散歩』



山下 柚実 著  
岩波アクティブ新書  
940円

—東京—そこは、日本の首都で、人口二二〇〇万を超える超巨大都市である。成功、欲求をはじめとする様々な面を持ちあわせ、人と人の付き合いが薄い無機質な匂いを漂わせる街、東京。

しかし、著者はそんな東京のイメージを鮮やかに打ち破ってくれる。著者自身の「手」「耳」「舌」「鼻」「瞳」の五感でとらえたありのままの東京の姿を、我々に伝えてくれている。我々が知っている所などでも、著者の五感のフィルターを通した紹介を読むと、改めて新鮮な魅力を感じる事ができる。

堅苦しくかまえて読む必要はない。写真も豊富で実に読みやすく、どんな読み進めてしまう、そう、まるで東京を散歩しているかのように。

(A・S)

『「農」の時代』

スローなまちづくりで  
都市とふるさとを再生する



進士 五十八 著  
学芸出版社  
2200円

休日になると、都会の喧騒から逃れ、自然のある場所へ行きたくなる。

二十世紀は「工業」が発展し、高い効率性、生産性を求め、国土の開発をあまりにも急ぎ過ぎた。その結果、都市から緑や水がなくなり、環境問題を深刻化させ、やすらぎの喪失により、さまざまな社会問題も引き起こしている。こうした問題を実践的に解決し、都市を癒すには、豊かな自然と文化性を併せ持つ「農」の多面的機能に目を向けることが必要だ、と著者はいう。

最近、全国各地で「花や野菜、果物をつくって、仲間をつくり、ハッピーになろう」という市民が増え、市民農園、農業ボランティアなどの活動が少しずつ始まっている。これからは「農」を通して、私たちの生活環境をゆつくりと考えてみたい。(m)

『ああメキシコ夜間小学校』

—おじいちゃん一年生留学



酒井 憲一 著  
アニメティライフ  
1429円

ドン・キホーテに勇気もらい、槍と楯の代わりに、学校に寄贈するほうきと電球パックを担いで、著者はメキシコシティの夜間小学校一年生となった。

本書は、その奮闘ぶりを様々な人々との心温まる交流を通して描くとともに、メキシコの社会、教育、文化を見つめ、本当の豊かさとは何かをわれわれ日本人に問いかける。

スペイン語もままならず、七〇歳を過ぎての大いなる挑戦の目的は、著者がライフワークとする草の根のアメニティ交流。著者はアメニティを「愛と生命が内在した総合快適性」と定義するが、日本から一万〇〇〇キロも離れたメキシコがこれほど生き生きと身近に感じられるのも、人間愛を基軸とした体験記だからにほかならない。(t)

種 目	受 験 資 格	試験実施日 (平成15年)	試 験 地	申込受付期間 (平成15年)
一級土木施工管理 技術検定・学科試験	所定の実務経験年数を有する者。 二級土木施工管理技士で所定の実務 経験年数を有する者。	7月6日(日)	札幌・釧路・青森・仙台・ 東京・新潟・名古屋・大阪・ 広島・岡山・高松・福岡・沖縄	3月3日から 3月17日まで
一級土木施工管理 技術検定・実地試験	当年度学科試験合格者。 その他の該当者。	10月5日(日)	札幌・釧路・青森・仙台・ 東京・新潟・名古屋・大阪・ 広島・岡山・高松・福岡・沖縄	8月20日から 9月3日まで
二級土木施工管理 技術検定 学科・実地試験 (土木・鋼構造物塗装・薬液注入)	所定の実務経験年数を有する者。	7月20日(日)	上記に同じ(青森を除く) 〔但し、種別:鋼構造物塗 装・薬液注入について は札幌・東京・大阪・福 岡〕	3月3日から 3月17日まで
一級管工事施工管理 技術検定・学科試験	所定の実務経験年数を有する者。 二級管工事施工管理技士で、所定の 実務経験年数を有する者。 職業能力開発促進法による管工事関 係の一級技能検定合格者。	9月7日(日)	札幌・仙台・東京・新潟・ 名古屋・大阪・広島・ 高松・福岡・沖縄	5月7日から 5月21日まで
一級管工事施工管理 技術検定・実地試験	当年度学科試験合格者。 その他の該当者。	12月7日(日)	札幌・仙台・東京・新潟・ 名古屋・大阪・広島・ 高松・福岡・沖縄	10月23日から 11月4日まで
二級管工事施工管理 技術検定 学科・実地試験	所定の実務経験年数を有する者。 職業能力開発促進法による管工事関 係の一級または二級の技能検定合格 者。	9月21日(日)	札幌・仙台・東京・新潟・ 名古屋・大阪・広島・ 高松・福岡・沖縄	5月7日から 5月21日まで
一級造園施工管理 技術検定・学科試験	所定の実務経験年数を有する者。 二級造園施工管理技士で、所定の実 務経験年数を有する者。 職業能力開発促進法による造園の一 般技能検定合格者。	9月7日(日)	札幌・仙台・東京・新潟・ 名古屋・大阪・広島・ 高松・福岡・沖縄	5月22日から 6月5日まで
一級造園施工管理 技術検定・実地試験	当年度学科試験合格者。 その他の該当者。	12月7日(日)	札幌・仙台・東京・新潟・ 名古屋・大阪・広島・ 高松・福岡・沖縄	10月23日から 11月4日まで
二級造園施工管理 技術検定 学科・実地試験	所定の実務経験年数を有する者。 職業能力開発促進法による造園の一 級または二級の技能検定合格者。	9月21日(日)	札幌・仙台・東京・新潟・ 名古屋・大阪・広島・ 高松・福岡・沖縄	5月22日から 6月5日まで
土地区画整理士 技術検定 学科・実地試験	学歴により所定の実務経験年数を有 する者。 不動産鑑定士及び同士補で所定の実 務経験年数を有する者。	9月7日(日)	仙台・東京・名古屋・ 大阪・福岡	5月7日から 5月21日まで
土木施工技術者試験 管工事施工技術者試験 造園施工技術者試験	指定学科の卒業見込者	12月21日(日)	全国主要都市	9月16日から 9月30日まで

種 目	講 習 対 象 者	講 習 実 施 日 (平成15年)	講 習 地 ( 地 区 )	申 込 受 付 期 間 (平成15年)
監理技術者講習	監理技術者資格者証の交付を受けようとする者。	逐次実施	各都道府県庁所在地及び 帯広市並びに旭川市	随時申込受付

## 技術検定試験・監理技術者講習のお問合せ先

### 財団法人 全国建設研修センター

試験業務局 〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-30 サウスヒル永田町ビル  
ホームページアドレス: <http://www.jctc.jp/>

- 土木施工管理技術検定〈一・二級学科及び実地試験〉(土木試験課)
- 土木施工技術者試験(施工試験課)
- 管工事施工技術者試験(施工試験課)
- 造園施工技術者試験(施工試験課) ☎ 03(3581)0138(代)
- 管工事施工管理技術検定〈一・二級学科及び実地試験〉(管工事試験課)
- 造園施工管理技術検定〈一・二級学科及び実地試験〉(造園試験課)
- 土地区画整理士技術検定〈学科及び実地試験〉(区画整理試験課) ☎ 03(3581)0139(代)
- 監理技術者講習(講習課) ☎ 03(3581)0847(代)

### FAX情報 0120-025-789

(FAX付き電話からおかけください。  
=無料サービス)

- 情報番号
- 11-試験・講習実施日程
  - 12-1・2級土木試験
  - 13-1・2級管工事試験
  - 14-1・2級造園試験
  - 15-土地区画試験
  - 16-施工技術者試験
  - 17-2級土木研修(終了)
  - 18-2級管工事研修(終了)
  - 19-監理技術者講習
  - 20-申込用紙販売先
  - 21-情報一覧と操作方法
  - 31-合格証明書の再発行

# 財団法人 全国建設研修センター

## — 主な業務 —

- ◆ 国、地方公共団体、公団、公社、民間の職員研修
- ◆ 建設業法にもとづく土木工事、管工事、造園工事の技術検定および土地区画整理法にもとづく技術検定
- ◆ 国際協力研修および国際交流
- ◆ 建設研修および建設技術等の調査研究
- ◆ 建設工事の施工技術に関する調査
- ◆ 民間測量技術者の養成

【本部事務所】東京都小平市喜平町2-1-2 ☎ 042(321)1634

【東京事務所】東京都千代田区永田町1-11-32 ☎ 03(3581)6111

## 出版案内

- |  |  |   |
|--|--|---|
| <input type="checkbox"/> 建築設備計画基準・同要領<br>平成12年版 定価6,090円 | <input type="checkbox"/> 建築設備設計計算書作成の手引<br>平成14年版 定価4,000円 | <input type="checkbox"/> 下水道事業の評価制度<br>定価2,100円                       |
| <input type="checkbox"/> 建築設備設計計算書書式集<br>平成14年版 定価3,600円 | <input type="checkbox"/> 下水道事業の手引<br>平成14年版 定価5,040円       | <input type="checkbox"/> 用地取得と補償 新訂4版<br>定価5,460円                     |
| <input type="checkbox"/> 建築設備設計基準<br>平成14年版 定価13,600円    | <input type="checkbox"/> 下水道計画の手引<br>平成14年版 定価5,880円       | <input type="checkbox"/> 技術革新と国土建設<br>谷藤正三著 定価6,321円                  |
| ● 各図書の定価は税込みとなっております。                                    | <input type="checkbox"/> 下水道維持管理の手引<br>定価5,403円            | <input type="checkbox"/> 排水再利用・雨水利用システム<br>計画基準・同解説<br>平成9年版 定価7,350円 |
| ● 送料は実費です。   |  |   |
| ● 購入ご希望の方は、書名と部数をご記入の上、現金書留で下記あてにお申込み下さい。                |  |   |

〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-32 全国町村会館西館 (財)全国建設研修センター・建設研修調査会 ☎ 03-3581-6341

from 写真家・平野暉雄

## 平野暉雄写真展 全国縦断「伝えたい橋」

「橋は、単に対岸同士を結ぶだけでなく、人と人、心と心、過去と未来を結ぶ、精神、文化の結節点です」。  
 こうした視点に立ち、47都道府県のその土地、その街、それぞれ違った四季、自然、文化を踏まえて、主に2000年以降に全国を回って撮り続けた57作品。これらを展示した平野暉雄写真展「全国縦断 伝えたい橋」が東京、大阪、福岡の富士フォトサロンにて開催されている。東京(6月27日～7月3日)、大阪(7月18日～24日)はすでに終了し、あとは福岡展を残すだけとなっている。



### 全国縦断「伝えたい橋」－福岡展

日 時：8月26(火)～9月5日(金)  
 AM 9:00 ～ PM 5:30 (土・日曜日休館)  
 場 所：富士フォトサロン  
 福岡市博多区住吉3-1-1 富士フィルムビル1F  
 TEL 092-281-0231

from 丸善株式会社

## 「橋のデザインと構造

### －世界の30橋に見る革新的なアイデア－

この10年間に建設された多くの橋梁には、エンジニアリングと建築の両面で高度な実験が行われ、また、文化的、建築的景観に彩りを添えるものとして注目を集めている。

本書は世界中で最近建設された新しい橋の中から興味深い30の橋を取り上げ、革新的なデザインや技術がどのように取り込まれているかを詳説している。

コウイーらのデンマークのグレートベルトから、バズ・ポーチマス・ルサンによるロンドンのプラシェット・グルーヴ橋の革新的なカバーブリッジまで、国際的に著名な建築家とエンジニアの共同作業をフルカラーの写真とイラストで紹介し、世界の橋の魅力に迫る。



■ 著 者：Matthew Wells  
 ■ 訳 者：綿引透・橋本光行  
 ■ 体 裁：A4変型判・192頁  
 ■ 定 価：12,000円  
 ■ 発 行：丸善株式会社

from (財)えひめ地域政策研究センター

## 「愛媛温故紀行

### －明治・大正・昭和の建造物－

■ 編集発行：(財)えひめ地域政策研究センター  
 ■ 体 裁：A4判・208頁  
 ■ 定 価：2,500円



愛媛県では、「愛媛広域文化交流基盤整備構想」の一環として、日本の近代化を支えてきた建造物である近代化遺産の全県的な実態調査を平成13・14年度の2か年にわたって行い、このほど「愛媛県近代化遺産調査報告書」をまとめた。調査対象は1,326件に及び、厳選した317件を「土木」「産業」「建築」「その他」に分類して紹介している。

本書がその報告書であるが、県内外の多くの人々に愛媛県の近代化遺産を知ってもらい、まちづくり資産としての活用も視野に入れていることから、報告書の枠を超え、カラー写真を多用して見て楽しく、読みやすい編集となっている。

お問合わせ先：(財)えひめ地域政策研究センター  
 TEL 089-945-4100

from (財)全国建設研修センター

## 『土木遺産を訪ねて－宮崎編－』

■ 編集発行：(財)全国建設研修センター  
 ■ 体 裁：B5判・113頁  
 ■ 定 価：非売品



(財)全国建設研修センターでは、このほど『土木遺産を訪ねて－宮崎編－』を刊行し、宮崎県内の各自治体や小中学校などに無償で配布した。

本書は、暮らしや産業を支えてきた歴史的土木建造物を調査・検証し、時代を語る大切な資産として次世代に伝えていくことを目的に制作したもので、宮崎県に現存する石橋やトンネル、ダムなど100件を集録している。

解説については、地域づくりや地域学習の教材としても役立つことができるよう、個々の土木遺産が持つ地域性や歴史性に重点を置いている。併せて、今後の保存・活用のあり方を考えてもらうため、それぞれの保存・活用の現状を紹介している。

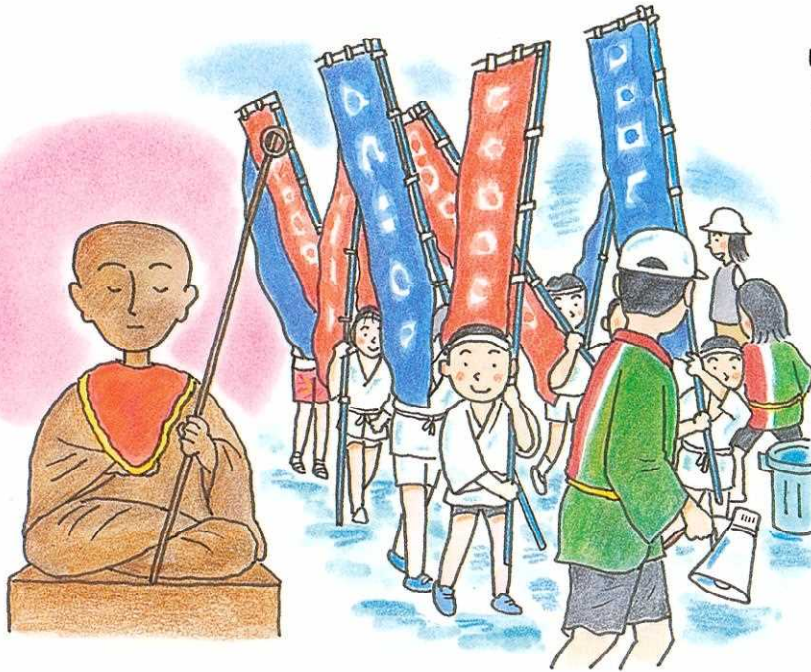
お問合わせ先：(財)全国建設研修センター・広報室  
 TEL 03-3581-2464



水かけ地蔵尊

(宮崎市・中村町)

文久三年(一八六二年)に大淀川に流れ着いた木像を延命地蔵尊と信仰。毎年、発見された日に地蔵尊を比喩に、乗せ町を練り歩き、町民がバケツの水を地蔵尊や綱を引く子供たちと見物人にもかける祭りで、火難、水難、旧産を守る地蔵尊として知られている。



イラスト・文/ヨシダケン



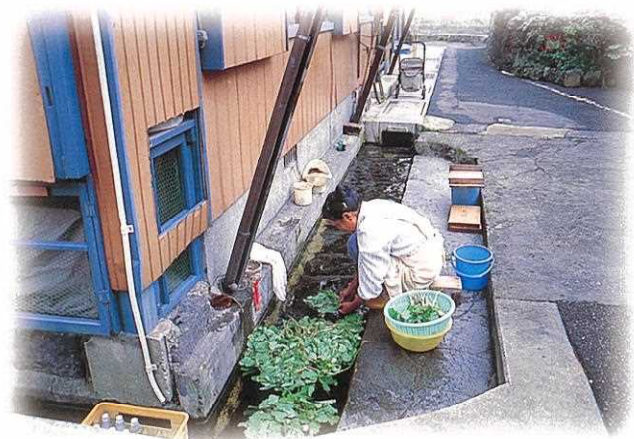
7月23日~24日

次号の特集

水路のある暮らしと風景

編集後記

『一冊の本』という本がある。頒価100円の小冊子だがその中身は濃い。その本の表紙をつくっているのが原研哉さん。表紙の背景はうすいグレー。その上に何らかのオブジェクトがぼつんと乗っている。何も乗せないとときもある。きわどいアイデアがすれすれの地平で試されている。目を凝らすとビタミン剤のように全身に効いてくる。つい巻末にある<表紙の気分>から読み始めてしまう。これがまた楽しい。「日本人の生活の欲望の水準を上げていくことが必要」だと仰る原さん。6月号表紙にはしわくちやのオブジェクトがまいと転がっていた。(0)



国づくりの研修

KUNIZUKURI TO KENSHU

平成15年7月30日発行©

編集 『国づくりと研修』編集小委員会  
東京都千代田区永田町1-11-32  
全国町村会館西館7階  
〒100-0014 TEL 03(3581)2464  
発行 財団法人全国建設研修センター  
東京都小平市喜平町2-1-2  
〒187-8540 TEL 042(321)1634  
印刷 株式会社 日誠

かつて日本各地には多くの水路が通り、その流水は灌漑用、生活用、防災用など多目的に利用され、憩いや遊びの空間も演出してきた。こうした歴史のなかで育まれた水利用の知恵とシステムは、今日求められている循環型社会の一つのあり方を提示している。

次号の特集では、水路のある暮らしを大切に守り続けているまち、暗渠となった水路の再生に取り組むまち等を取り上げ、水と人との豊かな共生関係について考えてみたい。

(写真:「湧水を流す水路で野菜を洗う」長崎県島原市 ©世界文化フォト)

今号の表紙スケッチ

## 【琵琶湖疏水 南禅寺水路閣】

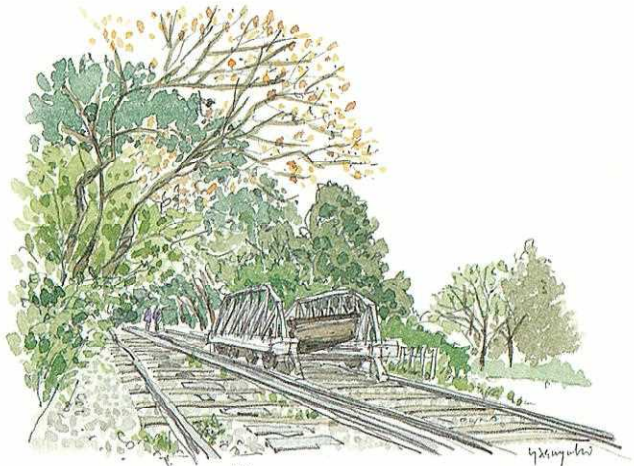
京都府

京都東山の名刹南禅寺の境内に煉瓦造りのアーチ橋が走っている。琵琶湖から、いくつものトンネルを抜けて、京都に流れてくる疏水の水路である。アーチをくぐって階段を登り、上へあがってみると、煉瓦でつくられた溝を勢いよく水が流れている。

明治維新後、東京遷都によって衰退する京都を復興するためと、平安京以降絶えず悩まされてきた水不足を解消し、京都市民に供給する水を確保するため、琵琶湖の水を利用することになった。この壮大な事業の設計を担当したのは当時弱冠23歳の田辺朔郎。彼は工部大学校の卒業論文で疏水計画をとりあげ、卒業後京都府に奉職し、工事を指揮した。重機械がまだなかった時代に苦勞の末、この事業を完成させた。この水を利用して当時まだ珍しかった水力発電を行い、京都に日本で初めての電車を走らせた。また疏水を水運にも活用し、インクラインもつくった。

完成後すでに1世紀がたち、水路閣の煉瓦は苦むして時代の流れを感じさせるが、1日も休むことなく、琵琶湖の水を京都市民に送り続けている。

(絵と文/安田泰幸 © YASUDA YASUYUKI)



けあけ  
鉄上インクライン  
疏水を利用した水運が開かれた。  
高低差が36mある南禅寺船溜と鉄上船溜の間は  
船ごと代領斜金軌道に乗せられ運ばれた。



九条山浄水場ポンプ室  
疏水の水と往時々の防火用水に利用するため  
つくられた施設で、設計は片山素熊と山本直太郎。

# 国づくりの研修

KUNIZUKURI TO KENSHU